

【年間賞】

春（二〇一九年一月〜三月）

【年間賞】

海流のぶつかる響き卒業歌

【次点】

もうすこし遊んでみたき落花かな

田の神の足跡小さき雪間かな

春はまだ見えぬか眼鏡かけ直す

あんぱんの臍は爛漫桜漬け

一夜にて雪の浄土や光堂

【候補】

愛の日やさほどならざる血糖値

臘梅の香ののぼりゆく御空あり

年の豆孫が数へて呉れにけり

花びら餅うれしきことはひそやかに

福島 渡辺遊太

神奈川 金澤道子

大阪 齊藤遼風

大阪 高角みつこ

東京 西川遊歩

宮城 長谷川冬虹

長野 金田伸一

奈良 喜田りえこ

京都 佐々木まき

大阪 澤田美那子

かぎりひて崩れさうなる我が家かな 香川 曾根崇

冬薔薇亡き人にくる誕生日 神奈川 中丸佳音

寒風や草木もこみもさらさらす 岐阜 夏井通江

ことばにも背筋ありけり飴山忌 石川 松川まさみ

入院の荷に入れてゆこうか仔猫 香川 丸亀葉七子

大雪や蒸気もくもく日本海 長崎 ももたなおよ

夏（四月〜六月）

【年間賞】

この初夏の素晴らしき日に何もせず 東京 森徳典

【次点】

日常の面倒横に朝寝かな 千葉 谷口正人

クロッキーに己が左手春深し 石川 花井淳

碧玉をもてあそぶ如新茶汲む 大阪 澤田美那子

炎ゆる砂一粒としてわれのあり 福島 渡辺遊太

【候補】

この星を一廻りして昼寝覚

愛知 稲垣雄二

たまさかや地球に降りて草むしり

北海道 芳賀魁子

地下足袋のこの若者が桜守

岡山 齋藤嘉子

たけのこや自肅生活もとうに慣れ

新潟 安藤文

街中の猫がみてゐるはるのつき

東京 長井亜紀

摘むほどに籠の輝く茶摘かな

京都 氷室茉莉

蝶がきて止まりさうなるお菓子かな

大阪 澤田美那子

燕より気持ちよき鳥ほか知らず

大阪 高角みつこ

山瀬来る抗う風車一基あり

北海道 村田鈴音

蟻地獄しづかに数を増やしけり

神奈川 三玉一郎

噴水を揺さぶる風や飛沫降る

兵庫 高見正樹

すかんぼやみんな貧しき日の記憶

香川 曾根崇

畝立てて五月の土を香らす

長野 金田伸一

木漏れ日にくすぐられては実梅落つ

長崎 ももたなおよ

秋（七月〜九月）

【年間賞】

いさかひし昔恥づかし墓洗ふ

長崎 川辺酸模

【次点】

なに目指し歩みし道や敗戦忌

福島 渡辺遊太

西日照り命のかぎり女哭く

兵庫 魚返みりん

無意識の森へ降りゆく熱帯夜

東京 西川遊歩

涼しさや無より現はれ石の庭

大阪 安藤久美

【候補】

新涼やスカイツリーが屋根の上

東京 楠原正光

引力のここに集まる大瀑布

石川 花井淳

夏の月石まだぬくくうづくまる

岐阜 夏井通江

袋掛桃のうたたね始まりぬ

和歌山 玉置陽子

革靴は歩く焼きこて炎天下

東京 岡田定

山百合のどきりと届き花開く

神奈川 伊藤靖子

藍浴衣藍の力を借りて逢ふ

兵庫 加藤百合子

青梧桐の蔭はみ出して三尺寝

香川 曾根崇

ばばさまの乗りこなしたり茄子の馬

東京 神谷宣行

敗戦日杭一本の墓標かな

奈良 喜田りえこ

救急車行きどころなき秋の暮

東京 櫻井滋

へうたんに酌みても尽きぬ酒やある

富山 酒井きよみ

落ち蟬の残る命を塵取りへ

石川 密田妖子

八月の祈りの初め広島忌

埼玉 上田雅子

両の目に病を得たり秋はじめ

長野 金田伸一

身に沁むやあらためて聞く子の齡

大阪 澤田美那子

凄まじきものひとつに孫七人

大阪 齊藤遼風

颱風の大きく強くのろのろと

兵庫 天野ミチ

山と積む根の無き言葉そぞろ寒

石川 松川まさみ

怒る母秋の夕焼より真つ赤

香川 丸亀葉七子

露の間と言ふと謂へども斯く老いき

大分 山本桃潤

冬(十月〜十二月)

【大賞】

綿虫の無より涌き出てさまよへり

岐阜 夏井通江

【次点】

朽ち果てて月光になる鯨かな

神奈川 三玉一郎

裸木の村に帰りぬブリューゲル

石川 花井淳

あちこちに寄り道したる炬燵かな

大分 竹中南行

帰省子のこころの丈も伸びてをり

東京 畠山奈於

スケーター白き孤独のただ中へ

大阪 澤田美那子

【候補】

耳たしかペンまたたしか夜の長さ

長野 金田伸一

宇宙から帰る人あり十三夜

東京 森徳典

かはいがるやうに無花果むきはじむ

石川 松川まさみ

われさきと迎えにくるよ雪螢

北海道 高橋真樹子

木枯や聞こえぬ耳を敬てて

福島 渡辺遊太

あかあをき卓の林檎よ今朝の冬神	奈川	越智淳子
大いなる佐渡の晴れ間の日向ぼこ	新潟	安藤文
烏瓜一つは命一つは死	愛知	稲垣雄二
燐芋や百歳にして母恋し	奈良	喜田りえこ
はづかしゆうない無花果吸え往還	長野	柚木紀子
すみれいろの夕暮包むマントかな	和歌山	玉置陽子
あわてても齡七十寝正月	長崎	川辺酸模
旅人のところで拾ふ落葉かな	北海道	芳賀魁子
あこがれのものぐさ太郎大旦那	東京	神谷宣行
吊られたる外套同士ひそひそと	愛知	青沼尾燈子
雪女郎今夜あたりと言ふ今夜	京都	佐々木まき
音かろく胸にひびかせ初霽	大阪	安藤久美
寢室の奥まで白む雪の朝	広島	鈴木榮子

一月十五日号

【特選】

冬木の芽だけが知つてる明日かな

神奈川 三玉一郎

餅花や喧嘩ばかりの三姉妹

神奈川 水篠けいこ

担がれて死人が踊る初芝居

神奈川 那珂侑子

お隣は若い家族や齋打つ

神奈川 那珂侑子

元日の平凡をこそ愛しけり

神奈川 片山ひろし

東京に寒といふ字の響きけり

神奈川 片山ひろし

大雪原誰も踏まぬ道真つ直ぐに

新潟 高橋慧

・誰も↓まだ

搾り出す玉の一句を寒の水

新潟 安藤文

白昼の無音恐ろし雪激し

岐阜 三好政子

・大豪雪

これよりの月日おそろし初暦

岐阜 梅田恵美子

闇に鳴り凍てし鈴の音初参り

京都 前田重明

・闇に凍てたり神の鈴。原句「こちやこちや」。

雪兔一匹ほどの今朝の雪

大阪 澤田美那子

花びら餅うれしきことはひそやかに

大阪 澤田美那子

花びら餅子のひげづらもほころびぬ

兵庫 藤岡美恵子

牛のごとゆるやかに年新たなり

兵庫 加藤百合子

臘梅の香ののぼりゆく御空あり

奈良 喜田りえこ

【入選】

湯気立てて友を迎へん蕪蒸

北海道 芳賀魁子

氷れる中一筋の滝ひかり落つ

宮城 長谷川冬虹

雪晴や菩薩の頭こそばいか

秋田 佐藤一郎

うつばりに鼻眠る櫓火かな

福島 渡辺遊太

・囲炉裏かな

早や嬉し句会の予定新暦

埼玉 上田雅子

父と見た山の峰々初日の出

埼玉 湯浅寒葵

しんしんと星々凍る音がする

千葉 若土裕子

・星の氷れる音すなり。ありありと。

一食を削りて買はむ千両かな

詠初や厠におきし唐詩選

・忘れ

通るたび鬼柚子に何か言ひにけり

・もの言ひにけり

バーグマンのかひな絡めり大白鳥

一抱へもある幸ひよ干蒲団

・も、不要。

腹熟し二駄歩き初詣

・歩く

我が蓬菜ひよつこりひようたん島にあり

凍星を飲んで病を治したし

・治すべし

山眠る線路の音がよくきこえ

千葉

麻生十三

千葉

麻生十三

東京

岡恵

東京

市村さよみ

東京

市村さよみ

東京

森徳典

東京

西川遊歩

東京

長井亜紀

東京

長井信彦

すずめにも重きあるらし枯葉ふむ

・らん

亀なくや空き場所に貼る六百句

・壁に貼りたる

ありがたき老いの食欲雑煮椀

今此処に在るといふこと初御空

亡き父の写真に向かふ御慶かな

初場所やがらんど廊下を勝力士

初硯一滴の水の玉となり

三が日花瓶の水を替へしのみ

餅花や赤子抱かせてもらひをり

・けり

鎌倉の路地たのしみて松七日

・たのしまん

地蔵にも供へてありぬ鏡餅

東京

長井信彦

東京

楠原正光

東京

畠山奈於

東京

齊藤拓

東京

齊藤拓

神奈川

越智淳子

神奈川

遠藤初恵

神奈川

金澤道子

神奈川

金澤道子

神奈川

金澤道子

神奈川

原田みる

オリオン座大きな氷柱垂らしけり

神奈川 三玉一郎

なづな打つ真剣にまた軽やかに

神奈川 松井恭子

地図になき道もよぎりて初詣

神奈川 松井恭子

・よぎりぬ

雑巾も箒も持たず三が日

神奈川 水篠けいこ

赤べこと親しくなりぬ七日かな

神奈川 那珂侑子

コロナ禍に負けじと喰らふ雑煮かな

新潟 安藤文

りんりんと母のピアノや冬籠り

新潟 安藤文

スチームのあつけらかんと部屋の間

石川 花井淳

磨り切れてこそそのジーンズ竜の玉

石川 花井淳

・竜の玉、再考。

鷹匠の腕の鷹やまじろみて

山梨 小泉雅恵

・腕に鷹はまじろめり

冬の大地まさりて水に茜融く

長野 柚木紀子

流水ら沖ぞ指しゆく欠片のまんま

長野 柚木紀子

みかんの木畑の間も日当たりぬ

岐阜 夏井通江

・に

籠り居も長し金魚は冬眠す

岐阜 三好政子

柵挿す病しこの世ををがみつ

岐阜 梅田恵美子

手を伸ばし空に結ぶや初みくじ

愛知 稲垣雄二

我がまだ我である顔初鏡

愛知 稲垣雄二

胃袋の小さき二人や七日粥

愛知 臼杵政治

・二人へ

雑煮膳まづ地水火の神々へ

愛知 宗石みず

七福神のやうに寄り添ふ若菜かな

愛知 青沼尾燈子

ゆく川の寒の水面は光かな

愛知 服部紀子

仮の世の我等の旅の遙けさよ

愛知 服部紀子

初日見に犬を起こすも大あくび

愛知 野口優子

給油する成人の日の乙女かな

三重 乾薫

初詣宮の石段こほりけり

三重 乾薫

初詣今年も夢を告げられず

三重

乾薫

雪嶺となりて頼もし愛宕山

京都

佐々木まき

初富士やマグマ秘めたるまま静か

京都

氷室葉胡

ぱんぱんの腹には双子春を待つ

京都

氷室葉胡

花びら餅雪の香りのほのかなる

大阪

安藤久美

負ひかねるもの負ひてゆく冬の道

大阪

内山薫

愚かさに打つ手はなきや冬將軍

大阪

内山薫

・なきか

頼もしき禪寺であり大根干す

大阪

澤田美那子

漱石に椀一杯の齋粥

大阪

齊藤遼風

・漱石へ

寒天を干すには良き日山家かな

大阪

齊藤遼風

冬ざれを住処としたる大鴉

兵庫

加藤百合子

・たり

日本の二音の言葉淑気満つ

兵庫

加藤百合子

肩越しに破魔矢の鈴の通り過ぐ

兵庫

千堂富子

歓声は幼とりたる初かるた

兵庫

藤岡美恵子

神棚の高くなりけり老いの春

兵庫

藤岡美恵子

首元へあぐるフアスナー寒きびし

兵庫

高見正樹

雪搔きや腰をいはずな風邪ひくな

奈良

喜田りえこ

左義長やみ熊野の風ただならず

和歌山

玉置陽子

一枝をくべ足して又冬耕す

香川

曾根崇

正月や寝太郎二年いな三年

長崎

ももたなおよ

吾子宿す命まふしみ春を待つ

長崎

川辺酸模

地吹雪を渡る日輪エロスかな

大分

山本桃潤

コロナ禍に大雪降りぬ寝正月

大分

土谷真理子

一月三十一日号

【特選】

冬薔薇亡き人にくる誕生日

神奈川

中丸佳音

・冬ばらや

寒風や草木もこみもきらきらす

岐阜

夏井通江

座禪して海鼠は人に突かれけり

愛知

稲垣雄二

年の豆孫が数へて呉れにけり

京都

佐々木まき

春はまだ見えぬか眼鏡かけ直す

大阪

高角みつこ

眉毛にもちらほら雪の茅舎かな

大阪

齊藤遼風

大寒と立ち向かう日の昼の酒

大阪

齊藤遼風

・ふ

お礼にと輝く大根提げて来し

香川

曾根崇

大雪や蒸気もくもく日本海

長崎

ももたなおよ

蠟梅の花より明けてゆく朝

長崎

ももたなおよ

端然と冬の影ある障子かな

大分

山本桃潤

ほほゑみの力をもつて粥柱

大分

竹中南行

【入選】

あすはまた雪となるらし寒椿

北海道

芳賀匙子

日溜りに命あたたため寒雀

北海道

柳一斉

二階まで匂ふ源泉冬館

岩手

川村香平

海幸彦山幸彦よ初茜

宮城

長谷川冬虹

室花や柩の窓をそつと閉づ

秋田

佐藤一郎

マスクばかり座つてをりぬ初電車

埼玉

上田雅子

これよりはかへる道なし枯野かな

千葉

麻生十三

・ここよりは、なき

わが庭にすぎたるものや龍の玉

千葉

麻生十三

室咲きや遅るる花の白の濃く

東京

市村さよみ

・白の濃く、では描写不全。

春立つや俳三昧の八十路哉

東京

森徳典

・立ちて

子の耳とおなじ冷たさ我の耳

東京

長井亜紀

ふるさとに鱸酒うまき一夜あり

東京

長井亜紀

・かな

本読みて曜日なき日々冬の虹

東京

長尾貴代

祖母逝きていつぱいの花籠に雪 東京 長尾貴代

何となく触って見たし猫柳 東京 楠原正光

・上五、再考を。つ

蠟梅や暮しのさまの見えぬ家 東京 畠山奈於

がさがさと栗鼠のろうぜき落ち椿 神奈川 遠藤初恵

・ひらがなで書くなら、らうぜき。辞書を。

不要不急のあれこれ想ひ春を待つ 神奈川 中丸佳音

探梅へまづは隣りの蕾より 神奈川 那珂侑子

・や

藁苞に雪残りをり冬牡丹 神奈川 片山ひろし

雪原に群れる鴉や何喰らふ 新潟 高橋慧

雪海苔や能登のおばあは無口なる 石川 花井淳

・なる、再考。

いきいきと龍太の句評日脚伸ぶ 石川 花井淳

厄災を覆ひ尽くせよ大雪よ 石川 岩本展平

雪晴の加賀金箔の廁かな 石川 岩本展平

凍てきはむ音は黄金(くがね)大地は茜 長野 柚木紀子

寒雀をふはりと心で抱きしめる 岐阜 夏井通江

・を、不要。

床を蹴る音の激しや寒げいこ 岐阜 古田之子

生駒なり野面に竹の寒晒し 岐阜 三好政子

狼とともに滅びしものは何 愛知 稲垣雄二

まづ酒を頼みて待たむ夜鳴蕎麦 愛知 臼杵政治

寒雀絡まるやうに蒼天へ 愛知 臼杵政治

雪だるま三つ並んだボンネット 愛知 野口優子

柵挿す更に門裏鬼門 京都 佐々木まき

・柵を挿して門

日を浴びてふくら雀に金の暈 大阪 高角みつこ

蠟梅の万と咲くのを見尽くさん 大阪 高角みつこ

日当たれる一枝に白き梅一輪 大阪 内山薫

書初のうしの並ぶや天満宮

大阪

木下洋子

大寒も通勤電車窓開けて

大阪

木下洋子

神仏双子の孫の大試験

大阪

澤田美那子

時代また大きく曲り冬椿

大阪

澤田美那子

こん年は春待つ思ひ切実や

兵庫

天野ミチ

日一日手繰り寄せては春を待つ

兵庫

天野ミチ

眩しさは光の子なる冬芽かな

兵庫

藤岡美恵子

鬼役にいつかなる子よ鬼は外

兵庫

藤岡美恵子

太太と獨の一字寒明忌

和歌山

玉置陽子

井手の水温か芹を摘みにけり

香川

丸亀葉七子

兄あれば寒餅たづさへ来る日和

香川

丸亀葉七子

白梅や師は端然と椅子にあり

香川

曾根崇

父の忌の墓に供へむ野水仙

長崎

川辺酸模

この国に無数の詩歌龍の玉

大分

竹中南行

臘梅や口の重さを詩にかへ

大分

竹中南行

凍滝や深閑たりき吾が心

大分

土谷眞理子

二月十五日号

【特選】

一夜にて雪の浄土や光堂

宮城

長谷川冬虹

桃源に遊び惚ける春を待つ

福島

渡辺遊太

あんばんの臍は爛漫桜漬け

東京

西川遊歩

愛の日やさほどならざる血糖値

長野

金田伸一

水仙の新芽をまたぐ朝の庭

三重

乾薫

入院の荷に入れてゆこうか仔猫

香川

丸亀葉七子

バレンタイン夫は小鳥に恋をする

長崎

もたなおよ

たんぼぼや生みの労苦を母言はず

長崎

川辺酸模

【入選】

画仙紙の余白零るる君子蘭

北海道

村田鈴音

・れて

数の子を嘔むや小さき幸の音

北海道

柳一斉

福寿草雪より光生れくる

北海道

柳一斉

春の地震十年経てもなほ余震

宮城

長谷川冬虹

神主の幣千切れ飛ぶ牧開き

埼玉

園田靖彦

・牧開き、からはじめる。にしても説明の句。

鯛焼きの熱きはらわたいただけり

埼玉

上田雅子

・きぬ

急須より茶の香り立つ春の午後

埼玉

湯浅寒葵

犬起きてまた眠るなり春うらら

埼玉

湯浅寒葵

涅槃会や亀立ち泳ぎゆらゆらと

埼玉

藤倉桂

会ふことの叶はざる日々雪しんしん

千葉

菊地原弘美

孫とよく遊びし父や蜆汁

千葉

若土裕子

梅つぼみ日がな一日見入りたし

千葉

谷口正人

すぐ沈む三日月淡し梅の花

千葉

池田祥子

・淡し、不要。

横揺れ長き地震や二月の闇に立つ

東京

岡恵

果樹園はむかし桑畑龍太の忌

東京

西川遊歩

朝粥を食べての後は冬ごもり

東京

猪飼篤

・の、は、不要。言葉で埋めてはいけない。

春立つやあからはじまるわが名あり

東京

長井亜紀

・かな

春寒や置かれたままのオートバイ

東京

楠原正光

梅一枝挿せばこの部屋しんとして

東京

堀越としの

・挿して、しづまりぬ

リハビリの一步一步や水温む

東京

櫻井滋

ハモニカ置きて春の海眺めけり

東京

齊藤拓

・春の海を上五か下五に。

ささらぎの空に山浮く龍太の忌

神奈川

越智淳子

・きさらぎ、不要。

近隣のめぐりにて足る梅見かな

神奈川

遠藤初恵

・近隣を、とはじめる。

早起きの空は三日月春の月

神奈川 森川^ツ子

・春の三日月

海苔ひびを眼下に旅の終わりかな

神奈川 水篠けいこ

・は

誕生日二月しろがね吾が髪も

神奈川 中丸佳音

一旦は仕舞ひて出すや春炬燵

神奈川 那珂侑子

・出して

水平に雪の原垂直に立山

新潟 高橋慧

・構図だけを描かないように。

牛に乗り春がゆらゆら来たりけり

石川 松川まさみ

句集成るなにはともあれ年の酒

長野 金田伸一

温室のはこべをすこし七日粥

長野 金田伸一

さるすべり椎骨二十二、三本つやつや

長野 柚木紀子

山姥のもてなしの椀路の臺

岐阜 夏井通江

ふつと止み最後の息や花明り

愛知 宗石みずえ

・止む

オンライン雪が誘ふ句会かな

愛知 青沼尾燈子

野の梅の高きにありてただ一輪

愛知 野口優子

・にありて、が説明。描写を。

土塊をおこして移す水仙かな

三重 乾薫

遠目にも梅は偽りなき香り

京都 佐々木まき

春になり大地弛みて地震かな

兵庫 天野ミチ

水浴びの鳥の来ている四温かな

奈良 喜田りえこ

二月二十八日号

【特選】

雛飾る妻の横顔忘れてたり

北海道 柳一斉

銀ぶらのさしてはたたむ春日傘

東京 岡田栄美

梢から春は来るらし老大樹

東京 齊藤拓

いつも誰か待つてゐるらし梅の花

石川 松川まさみ

泥付きの大根と孫が来たりけり

長野 金田伸一

・が、不要。

かぎりひて崩れさうなる我が家かな

香川

曽根崇

命ある今日のまぶしや初つばめ

長崎

川辺酸模

もの言はぬ海あをあと三月末

長崎

川辺酸模

【入選】

だんだんにウキスキー熟る春の間

北海道

高橋真樹子

春風やカラシコロンと絵馬触るる

北海道

村田鈴音

荒野にも夢見こちの雲雀東風

北海道

芳賀魁子

誰かゐるフェイスブックの春の間

岩手

川村查平

しじみ汁マスク姿のはや一年

宮城

長谷川冬虹

冬の間捨てし芥を打ち返す

福島

渡辺遊太

長閑さのあれこれで済む夫婦かな

埼玉

園田靖彦

雪解川東ね東ねて大黄河

埼玉

園田靖彦

新しき春を眩しむ雛かな

埼玉

上田雅子

土筆摘む母子の上をグライダー

埼玉

藤倉桂

・空を

かくれんぼのくるぶしに咲く花葶

千葉

菊地原弘美

屋上をビルからビルへ蜂が飛ぶ

千葉

菊地原弘美

・屋上や

一枝は父母の写真に梅の花

千葉

池田祥子

・へ

手作りの雛の命よ四十年

千葉

池田祥子

腹這いて少年の日やいぬふぐり

千葉

麻生十三

・ひ

大きなマスクをかけたくなりぬ冬牡丹

東京

岡恵

初蝶はころびつまるびつ坂をゆく

東京

岡恵

マニキュアのしみるささくれ花の冷

東京

岡田栄美

口紅は乾涸びしまま柳絮飛ぶ

東京

市村さよみ

子等の声響かぬ春の広場かな

東京

森徳典

川止めのやうな暮らしや春の虹

東京

西川遊歩

風神が轟き走る冬の空

東京

猪飼篤

骨軋み骨の痛むや朧月

東京

長井亜紀

母唄う哀しき軍歌春の宵

東京

長尾貴代

・ふ

春雨や樋を流れる水の音

東京

楠原正光

・るる

たまゆらの幾何学模様薄氷

東京

畠山奈於

人生の薄暗がりや蜷汁

東京

齊藤拓

・に

白木蓮空の涙を拭けり

東京

齊藤拓

・ひけり

池の面にアカミミガメや水ぬるむ

神奈川

伊藤靖子

菜の花の丘を下れば布良の海

神奈川

遠藤初恵

手水鉢底に南天二三粒

神奈川

遠藤初恵

初蝶を吹き戻したり切通

神奈川

金澤道子

種袋そんなにふれば目がまはる

神奈川

松井恭子

風光る真つ逆さまにペンの先

神奈川

松井恭子

ミモザ手に銀座通りを大股に

神奈川

水篠けいこ

丸襟の白のブラウス齊咲く

神奈川

水篠けいこ

土筆煮て母と娘の別れかな

神奈川

片山ひろし

新聞を何度も読んで冬籠り

新潟

安藤文

・むや

東風吹かば伊豆に旅せん金目鯛

石川

花井淳

春天や鳶おもむろに急降下

長野

大島一馬

触合うて永遠時間プラトン「眼のまたたき」

長野

柚木紀子

水位標根元にはこべらほとけのざ

岐阜

古田之子

・に、不要。

葛湯浴く戒厳令の昔あり

岐阜

三好政子

小さき手が開けば三つ雛あられ

愛知

臼杵政治

・を

寢息あれば夫生きてをり春の雪

愛知

宗石みずえ

・寢息たて、あるいは、して

未除染の帰れぬ故郷果ての雪

愛知

服部紀子

畦に咲く草花の色蝌蚪の夢

愛知

服部紀子

ミモザ咲くキリンの背よりなほ高く

愛知

野口優子

春水に臍だしてゐる蛭貝

京都

佐々木まき

教材のどきりと届く老いの春

京都

氷室茉莉

手をとりにて母の爪切る春浅し

大阪

内山薫

盆梅の二百歳なる気魄かな

大阪

木下洋子

春の雪おやつに炙るあられ餅

大阪

木下洋子

吉野雛はかなきものを俤に

大阪

澤田美那子

・はかなきひとを

七色の糸を通して針供養

大阪

澤田美那子

風花や空あるかぎり鳶高む

大阪

齊藤遼風

まほろばに野火幾筋や昼の酒

大阪

齊藤遼風

魂の遊びゐるなり春の雲

兵庫

加藤百合子

・ゐるなり 不要。

風は火を火は風を追ふ野焼かな

兵庫

千堂富子

動くものすべて光や春兆す

兵庫

藤岡美恵子

・春兆す、説明。別の季語を。

野遊びや草地に並ぶ乳母車

兵庫

高見正樹

春の沖クルーズ船の遠さかる

兵庫

高見正樹

椿餅ひとつは会へぬ母の為

和歌山

玉置陽子

亀鳴くやじわじわ溶ける舌下錠

香川

丸亀葉七子

菱形もこころのかたちひなまつり

愛媛

古志湊子

・は

父祖の墓倒れしままに二月尽

熊本

筑紫秋

・たるまま

音楽を聞く日溜りへ石鹼玉

大分

土谷眞理子

・を

大楠の神に詣つや春の山

大分 土谷眞理子

生き辛き世の中なれど蓬摘む

鹿児島 大西朝子

・蓬餅

三月十五日号

【特選】

春禽のひかりとなりて飛び込み来

北海道 芳賀魁子

・春の鳥ひかりとなりて。原句の「春禽の」はただの説明である

ことに気づいてほしい。

海流のぶつかる響き卒業歌

福島 渡辺遊太

名乗りませ哀しみの死者達戻り寒

愛知 服部紀子

・達、不要。自分で気づかないと。

その日から私は何をしてきたか

愛知 服部紀子

・三・一一私は何を

先生のおき先生よ飴山忌

大阪 木下洋子

田の神の足跡小さき雪間かな 大阪 齊藤遼風

掻き寄せて結びしものよの小鳥の巢 兵庫 加藤百合子

・の、不要。「ものよ」↓「ままの」

火の粉舞ふ闇のなかり春来たる 奈良 喜田りえこ

浜大根咲く東北へつづく海 香川 丸亀葉七子

白木蓮の空へみなぎる歓喜かな 長崎 川辺酸模

・白木蓮と歓喜が離れてはいけない。型に当てはめるからこんな句になる。空へみなぎる白木蓮の歓喜かな

【入選】

若狭井の一掬の水春の水 北海道 高橋真樹子

鮭飯寿司たべつくし樽春来る 北海道 高橋真樹子

・リズム、ダメ。

パレットに黄色溶かしつ蝶々来ぬ 北海道 村田鈴音

・ぬ、不要。これもリズム感欠如。

はだれ雪煉瓦の独房窓も無し 北海道 芳賀魁子

・の、不要。

雪解や風こちよく眼を覚まし

北海道 柳一斉

・雪解の

下萌や更地の続く被災浜

宮城 長谷川冬虹

君らみな真つ直ぐ生きよ卒業歌

宮城 長谷川冬虹

女らは岩海苔搔けり地震の磯

秋田 佐藤一郎

ハイホーと歌ふ小人や木の根開く

秋田 佐藤一郎

野相撲や子に投げらるるのどかさよ

埼玉 園田靖彦

・や、ダメ。

新妻は牛の使ひ手春田鋤く

埼玉 園田靖彦

すこやかに自肅の日々や大朝寝

埼玉 松本邦吉

ポケットに折々のうた青き踏む

千葉 若土裕子

鋤鋤の納屋に古びて春田かな

千葉 麻生十三

映画館でて春昼の白き町

千葉 麻生十三

・この春昼は上五においてもいい。春昼や

初蝶がはじめて挑む強き風

東京 岡田定

野茨や幼き頃の通い路かな

東京 森徳典

・通ひ道に

朧なる月より朧なる地球

東京 長井亜紀

夫の手ががさりと春を掴みけり

東京 長井亜紀

・が、不要。

春をゆく亀の手足のゆらゆらと

東京 長井亜紀

うららかやデッキチエアを海の風

東京 楠原正光

水温むいつも一羽の鷺けふも

東京 畠山奈於

故郷の浜砂色の牡蛎届く

神奈川 伊藤靖子

春潮や親しきものでありし海

神奈川 遠藤初恵

大空にふれて下りくる春の蟻

神奈川 松井恭子

兄焚きし玉筋魚届き昼の酒

神奈川 土屋春樹

・届く

侵蝕の内灘砂丘島曇

石川 花井淳

・鳥曇がダメ。考える。

ことのほか高き馬の背風光る

石川

岩本展平

老犬の鈍き動きもあたたかし

石川

岩本展平

現れて初蝶ふつと幻に

石川

松川まさみ

ロボットと掃除を分かつ日永かな

長野

金田伸一

雨上がり木の芽全山微動せり

長野

大島一馬

雪解水軽やかにいざ田畑へ

長野

大島一馬

・田へ畑へ

津波か春聞鳴りつばなしにクラクション

長野

柚木紀子

まつくろな爪の子供やよもぎ摘み

岐阜

古田之子

・子どもの爪や蓬摘む

梅の下ただただぼうと一日過ぐ

岐阜

古田之子

・梅の花ただ

蜥蜴出て背中温める真昼かな

岐阜

梅田恵美子

安らぎの暗闇へ雛納めけり

愛知

稲垣雄一

篠田桃紅(とうこう)の絶筆自在花筏

愛知

宗石みずえ

・篠田、不要。

葱坊主インターナショナル高らかに

愛知

青沼尾燈子

呼びかければ応ふる遺影暖かし

京都

水室茉莉

をみな老いあら姦しや雛まつり

大阪

安藤久美

樋の先までも金閣鳥曇り

大阪

澤田美那子

・も、不要。

莊殿の闇を火の粉の修二会かな

兵庫

加藤百合子

十年や人それぞれに福島忌

兵庫

天野ミチ

・の

春の海頭を垂れて祈る人

兵庫

天野ミチ

あたたかや表わら細工のこうのとり

兵庫

藤岡美恵子

・の、不要。

新しき運動靴に春の土

兵庫

高見正樹

煌めきて五羽はをるらし春の鴨

奈良

田原春

壺焼の吹きこぼれつつ運ばれぬ

和歌山 玉置陽子

・運ばるる

黙禱のしじまへ落ちる椿かな

和歌山 玉置陽子

・落つる

伊予柑の香のあふれ立つ軍手かな

香川 曾根崇

・あふれ立つ、不要。

三月のまふしき海よ無念せよ

長崎 川辺酸模

遠足よ帰らざるまま旅をして

大分 山本桃潤

・遠足の

火の山の神へ馳するや野火の群

大分 竹中南行

霾晦天上目指す死者の列

鹿児島 大西朝子

三月三十一日号

【特選】

一年を経てむつまじき雛かな

埼玉 上田雅子

もうすこし遊んでみたき落花かな

神奈川 金澤道子

ことばにも背筋ありけり飴山忌

石川 松川まさみ

【入選】

流水や海明け待ちぬ漁船群

北海道 村田鈴音

・海明けを待つ

梅が香やいまさら愛国萬葉集

北海道 柳一斉

祇園精舎合掌してゐる牡丹の芽

宮城 長谷川冬虹

母の忌の雪割草は咲きそろう

秋田 佐藤一郎

生涯の岐路とも知らで大朝寝

埼玉 園田靖彦

・ず

叛逆の碑拝し種浸す

埼玉 園田靖彦

子どもらの雑魚寝のかほや花筵

埼玉 松本邦吉

月朧町ゆくわれのなほおぼろ

埼玉 松本邦吉

・は

やはらかに蝶ふきあぐる菜花畑

千葉

若土裕子

・ げて

一輪のらつば水仙月仰ぐ

千葉

谷口正人

茶を断ちし母の好みの花湯かな

千葉

麻生十三

病み上がるこれぞこの世の春の風

東京

横山直典

・ 病み上がり

白牡丹ひらくや影もひらきけり

東京

岡恵

明ほのや月もほのかに花の色

東京

岡恵

老木の折れる枝先花ひとつ

東京

岡田栄美

・ れし

永き日やセネカの背中斯く遠く

東京

市村さよみ

競漕の切歯膂力や舳先の差

東京

西川遊歩

金継ぎの皿にどつしり桜鯛

東京

西川遊歩

サクラエビからり掻き揚げ大岡忌

東京

西川遊歩

花びらを乗せて一艘戻りけり

東京

長井亜紀

・ 乗せて、大げさ

恐ろしき昨夜の雷や種浸し

東京

長井亜紀

花萼や抜かれても一面に花

東京

長尾貴代

父逝きて父に友あり花吹雪

東京

長尾貴代

鬨争の封鎖の中を入学す

東京

楠原正光

・ へ

どしや降りの小枝に揺れる青蛙

東京

楠原正光

・ どしや、るる

花仰ぐ姿の似たりあにいもと

東京

畠山奈於

轉りは近く遠くに目覚めかな

東京

堀越としの

・ 轉りを

みちのくの桜はいかにこの十年

神奈川

越智淳子

日傘さす女に遇いそな壘粟の原

神奈川

遠藤初恵

・ ひ

この椅子は魔法の椅子よ春眠し

神奈川

金澤道子

ちと老いし犬ともにして桜狩

神奈川 三浦イシ子

・犬をともし

旋回の三度目高し鳥帰る

神奈川 松井恭子

・く

ものの芽のみな喜々として天を指す

新潟 高橋慧

ざつくりと地打ち返す飴山忌

石川 松川まさみ

大空の岐阜羽鳥駆さへづれり

岐阜 夏井通江

水温む雄勝の硯懇ろに

岐阜 三好政子

燕飛ふ太郎や次郎や三郎や

愛知 稲垣雄二

制癌剤投与はあした花の雨

愛知 宗石みずえ

西行が妻のおもかげ春の寺

愛知 青沼尾燈子

観音堂探して迷ふ山桜

愛知 野口優子

剪定やときに金閣見あげつつ

京都 氷室茉莉

立派な名もろうて眠る仔猫かな

大阪 安藤久美

三月は我が家の味のくぎ煮かな

大阪 木下洋子

白木蓮は白磁の小皿金平糖

大阪 澤田美那子

永き日の桜あんぱんよく売れる

大阪 澤田美那子

遊ぶ児と寛げる母春の芝

兵庫 高見正樹

・寛ぐ母と

蠶や子ども撃つとは何事ぞ

奈良 喜田りえこ

・上五、再考

野菜畑ひとすじ明かきチューリップ

奈良 田原春

・一畝赤き

一羽来て噂つてゐる雨後の屋根

奈良 田原春

酢諸子を今宵の肴實の忌

和歌山 玉置陽子

金色の走るや蜥蜴穴を出て

岡山 齋藤嘉子

飴山忌少し遅れて母の忌も

香川 丸亀葉七子

鶴を折る白寿の叔母や桜餅

香川 曾根崇

病床の友見よ君の花の庭

長崎 ももたなおよ

きみとゐる今のまふしや蕨もち

長崎 川辺酸模

・下五、再考。

大阿蘇も目覚める頃や木の芽和

長崎

川辺酸模

・下五、再考。

ぬるぬると蛸道走す春の宵

長崎

川辺酸模

・下五、再考。

もう八十母の言ひ草木の芽和

大分

土谷眞理子

四月十五日号

【特選】

街中の猫がみてゐるはるのつき

東京

長井亜紀

仏生会いまも湧きつく甘露の井

神奈川

金澤道子

初蝶や今日より羽根の汚れゆく

愛知

稲垣雄二

摘むほどに籠の輝く茶摘かな

京都

氷室葉胡

蝶がきて止まりさうなるお菓子かな

大阪

澤田美那子

地下足袋のこの若者が桜守

岡山

齋藤嘉子

飴山忌あなたを真似て妻愛す

大分

山本桃潤

死ぬるまでホ句と同行風光る

大分

竹中南行

【入選】

遠山に束の間白き花の雲

北海道

村田鈴音

・白し

顔に白日高の仔馬大地喰む

北海道

村田鈴音

空間を笑ひころげるこぶしかな

北海道

芳賀彪子

花守ぞ鉢巻きりり花殻摘む

宮城

長谷川冬虹

・花守は

手這坂下ればまほろ桃の花

秋田

佐藤一郎

耽読の余熱に一夜龍天に

福島

渡辺遊太

海境の底のしげき花の雨

福島

渡辺遊太

うぐひすの総出迎へやわが故郷

埼玉

園田靖彦

刈り込みの一蔓貫ふ郁子の花

千葉

池田祥子

朝楽し春のキャベツのある限り

東京

岡恵

・日々楽し

二階から雨に向かって石鹼玉 東京 岡恵

・旧かなは自分で。

跳箱は勇気だぼんと春の風 東京 神谷宣行

うたにうたうたひ合はせて大岡忌

東京 西川遊歩

・合はせよ

恋もせず説教もせず猫眠る 東京 長井亜紀

法要の一族も老ゆ暮の春 東京 杜野廉司

・一族老いぬ

はやばやと隣家にかかる鯉幟 東京 楠原正光

・隣の上げる

露の暮見つけて今朝のおみおつけ 東京 堀越としの

抜け出して春の渚に小半時 神奈川 遠藤初恵

境内の椿で暮いて花御堂 神奈川 金澤道子

・きぬ

老木の芽にしづかなる光かな 神奈川 三浦イシ子

・芽の。この違い、たいへん大事。

春秋の重さに沈む鯨かな 神奈川 三玉一郎

春秋に足を取らるる渚かな 神奈川 三玉一郎

・以上2句、理屈。

けやき通りはなみずき通り若葉 神奈川 松井恭子

・みな若葉

エントランスの黒の一群新社員 神奈川 水篠けいこ

・最初の、の、不要。

こそげ取る筍飯の御焦げよき 神奈川 中丸佳音

・こそ

丹誠の藤の花見て逝かれけり 神奈川 那珂侑子

・けむ

寄居虫の次の殻ゆく速さかな 神奈川 片山ひろし

・への、へと

どのやうにどこ掴もうかうぐひす餅 神奈川 片山ひろし

深き深きコロナの闇を春の月

新潟

安藤文

・に

菜の花や義民を祀る五輪塚

新潟

高橋慧

葦焼けば越の山々ゆらくなり

富山

酒井きよみ

二三言聞きし覚えも朝寝かな

石川

松川まさみ

槽爆せる四月の朝の氷点下

長野

金田伸一

白富士さやうなら花影と還ります

長野

柚木紀子

半透明にかほる蠟梅もう文字ではかけぬ

長野

柚木紀子

心膜炎かしら陽炎ゆれている

長野

柚木紀子

玉ねぎをころがし遊ぶ厨かな

岐阜

夏井通江

・遊ぶ?

大空にいどむ力よ朴の花

岐阜

古田之子

・力を

裏木曾や芽吹き谷の山桜

岐阜

三好政子

クリニツクの広き天窓春動く

岐阜

三好政子

城白く輝く空や初つばめ

岐阜

梅田恵美子

・を

花冷えの世間へ棺担ぎ出す

愛知

稲垣雄二

・世界へ

蠅の子の生れてそのまま嫌われり

愛知

宗石みずえ

・そのまま、不要。旧かな。

車椅子を受け入れし母風信子

京都

吉田千恵子

ジャム混ぜる木べらは重し日永かな

京都

吉田千恵子

・木べらの重き

くにやくにやの赤子洗はん花の昼

大阪

安藤久美

新緑や日に日に隠る遠き道

大阪

内山薫

・隠れ

上り来て京一望や御忌詣

大阪

木下洋子

やはらかき指の腹もて茶摘かな

大阪

木下洋子

・以上2句、既存の発想。

春日傘稚児抱く妻に差しかけぬ

兵庫

千堂富子

・妻へさしかけて

春の行くどこへも行けぬ人置きて

奈良

喜田りえこ

春満月龍抜け出たき絵天井

香川

丸亀葉七子

鳴龍を鳴かせお遍路去りにけり

香川

丸亀葉七子

人の世にぬつと古代魚春の闇

長崎

ももたなおよ

白牡丹蟻一点の翳りかな

長崎

川辺酸模

ほんのりと草の香りや針魚食ふ

長崎

川辺酸模

四阿は湖のなかほじ羊草

大分

山本桃潤

春の服友の細きに驚きぬ

フランス

廣瀬玲子

四月二十日号

【特選】

日常の面倒横に朝寝かな

千葉

谷口正人

惜春や終のドライブ老妻と

東京

森徳典

カツ井食ふ春の憂ひをはらふべく

東京

神谷宣行

眩しさの麦鳥賊の箱競り落とす

東京

西川遊歩

石まるくまるく研くや春のみづ

東京

長井亜紀

たけのこや自粛生活もとうに慣れ

新潟

安藤文

クロッキーに己が左手春深し

石川

花井淳

よそゆきの顔となりたる春日傘

石川

岩本展平

聖書いづくに水ぬるむ最晩年

長野

柚木紀子

一口に食へられさうな雨蛙

京都

佐々木まき

燕より気持ちよき鳥ほか知らず

大阪

高角みつこ

世の中は不思議いつばいさくらんぼ

奈良

喜田りえこ

責任を取らづ逝きけり昭和の日

奈良

喜田りえこ

村ぢゆうの戸があいてゐる茶摘どき

香川

曾根崇

【入選】

亡き人の戻らすこち花ふふむ

北海道

芳賀魁子

間借りせし私鉄の小駅昭和の日

宮城

長谷川冬虹

休らうて手拭ひ使ふ花へんろ

宮城

長谷川冬虹

整理しワクチンを待つ昭和の日	秋田	佐藤一郎
花散りぬ花なることを知りもせず	福島	渡辺遊太
苗代に這ひつくばるや若い二人	埼玉	園田靖彦
しらんまにとしとうてもた山笑ふ	埼玉	松本邦吉
てふてふや抱きあふことも忘れたる	埼玉	松本邦吉
陸奥の余花に泳ぐや鯉のぼり	千葉	若土裕子
住み慣れし家離るるや竹の秋	千葉	谷口正人
葉先より手に来て軽し天道虫	千葉	池田祥子
柏餅あつといふまにおじいちやん	東京	神谷宣行
スニーカー春光のなかいざゆかん	東京	長井亜紀
子供の日円弧雲梯すいと	東京	楠原正光
会釈して譲りあふ道青き踏む	東京	畠山奈於
ワクチンのクーポン到来端午かな	東京	櫻井滋
天婦羅かそれとも寿司か柿若葉	神奈川	遠藤初恵
ご神体は牡蠣の貝殻春惜しむ	神奈川	金澤道子

気の重き用事がひとつ花は葉に	神奈川	金澤道子
雀の子土塊だけを信じけり	神奈川	三玉一郎
波を待つ脛うつくしき素足かな	神奈川	三玉一郎
風邪に寝て一日春を満喫す	神奈川	三玉一郎
蛇踏むや一瞬なんと永きこと	神奈川	松井恭子
御持たせの筍飯のランチかな	神奈川	水篠けいこ
新聞の切り抜き溜まる日永かな	神奈川	水篠けいこ
雀の子フェンスの向こうはアメリカぞ	神奈川	水篠けいこ
水平線の丸みほくなる春愁ひ	神奈川	中丸佳音
老女たちたんぼの絮吹ききそひ	神奈川	中丸佳音
大鷲の胸の白さに夏来たる	神奈川	中丸佳音
入園児背丈に合わぬユニフォーム	神奈川	土屋春樹
たとえへなき悪相なれど恋の蝦蟇	神奈川	湯浅菊子
孫が来るその日のための花イチゴ	神奈川	那珂侑子
ぼうたんの最期は雨に打たれ散る	神奈川	那珂侑子

松蟬の鳴いて止む間の長かりき	神奈川	片山ひろし
穂の芽や手折りてボキと空揺るる	新潟	高橋慧
乳を吸ふ赤子落とすな目借り時	富山	酒井きよみ
亀鳴くや砂金洗ひし澤あると	石川	花井淳
雪形の猿微笑む加賀平野	石川	花井淳
葉桜や金箔浮かぶ昼の酒	石川	岩本展平
朧夜や言うてしまへば味気なく	石川	松川まさみ
ふと高く飛び去る蝶の行き処	長野	金田伸一
山里はほんによかそこ浅淵汁	長野	金田伸一
行く春清書し誤嚙しなくなる	長野	柚木紀子
春の朝木の匙軽く野菜スープ	岐阜	三好政子
青鰻や帰農の夫の畑曆	岐阜	三好政子
絡み付く枝のおどろや山の藤	岐阜	三好政子
桜しべ人恋ひしくて吹き溜まる	岐阜	梅田恵美子
父母は亡し子は巢立ちけり柿若葉	愛知	宗石みずえ

土筆摘む小さき膝は泥まみれ	京都	吉田千恵子
沖繩は今だ沖繩昭和の日	京都	佐々木まき
雨がよぶ雨か雨蛙よぶ雨か	京都	佐々木まき
春泥の先に潤一郎の墓	京都	氷室茉胡
沈黙の長き鉾蔵春惜しむ	京都	氷室茉胡
姉らしく何か言はねば桜餅	大阪	安藤久美
ゆく春や小さきカメラを手の中に	大阪	高角みつこ
春風や一日千歩目標に	大阪	内山薫
遍路寺案内の犬についてゆく	大阪	木下洋子
マンゴーの香る紅茶や夏きたる	大阪	木下洋子
語るごと王妃遺愛の香水瓶	大阪	木下洋子
黄金週間樟も櫨も芳しく	大阪	澤田美那子
九条で育ちて憲法記念の日	大阪	澤田美那子
筍とくれば木の芽を忘るるな	大阪	澤田美那子
父の夢母の夢みる朝寝かな	大阪	齊藤遼風

フエンス越え風船ふたつ自由なり
兵庫 魚返みりん

春日傘傾げるだけの遠空和釈
兵庫 千堂富子

庭に出て体操すればチューリップ
兵庫 天野ミチ

力作の器出番や野蔭炊く
兵庫 藤岡美恵子

ひと想ふゆへに我あり春の雨
兵庫 福田光博

共に居て余生それぞれ夏めきぬ
兵庫 高見正樹

頑張るなナンジャモンジャに囁かれ
奈良 喜田りえこ

うすべにの絵馬の乳型春深む
和歌山 玉置陽子

家苞の新玉葱の匂ふバス
和歌山 玉置陽子

山桜地霊となりし仏たち
岡山 齋藤嘉子

朴の花開きかけたと山の声
香川 丸亀葉七子

わが郷に百歳二人柏餅
香川 曾根宗

ラジオドラマ出てくるテレビ昭和の日
長崎 ももたなおよ

メーデーやワクチンを待つ人の列
長崎 ももたなおよ

蝶一羽乗せて離任の船出かな
長崎 川辺酸模

掘り立ての筍抱き友来る
長崎 川辺酸模

五十年夫婦はともにお風入
大分 山本桃潤

婆ちやんのやうな担任入学式
大分 山本桃潤

虎杖や自制に揺らぐ民主主義
大分 竹中南行

惜しみをり惜しむともなきこの春を
大分 竹中南行

春蟬や聞けば山河の懐かしき
鹿児島 大西朝子

友の忌のその日を耐へる養花天
鹿児島 大西朝子

摘み草の宿へ光や花木五倍子
フランス 廣瀬玲子

五月十五日号

【特選】

山瀬来る抗う風車一基あり
北海道 村田鈴音

この初夏の素晴らしき日に何もせず
東京 森徳典

ひなげしやしやし留めん車椅子
東京 櫻井滋

蟻地獄しづかに数を増やしけり
神奈川 三玉一郎

今年まだ箱を出てこぬ夏帽子
神奈川 三玉一郎

夜を鳴く時鳥明日吾は歩けるか

長野

柚木紀子

妖精に会へずに老いし薔薇の花

岐阜

夏井通江

碧玉をもてあそぶ如新茶汲む

大阪

澤田美那子

フクシマの声なき声や五月闇

兵庫

千堂富子

泳ぎ疲れは父親ならん鯉のぼり

兵庫

藤岡美恵子

噴水を揺さぶる風や飛沫降る

兵庫

高見正樹

水檜の水が誘ふや更衣

奈良

喜田りえこ

更衣青空近くなりしかな

岡山

齋藤嘉子

大渦の底見せて欲し観潮船

香川

曾根崇

すかんぼやみんな貧しき日の記憶

香川

曾根崇

散りてなほ唐紅の牡丹かな

長崎

川辺酸模

泰山木唐変木も花開く

大分

山本桃潤

【入選】

筋肉痛すこし和らぐ花水木

岩手

川村查平

コロナ禍の夜逃げの店や春の暮

岩手

川村查平

春キャベツ茹であがりたる朝ごはん

宮城

長谷川冬虹

カーネーション貧しき家に生まれけり

秋田

佐藤一郎

避難地は茅花流しの波の果て

福島

渡辺遊太

千本の薔薇を砦に籠もりをり

福島

渡辺遊太

手紙書くひとりつきりの緑の夜

埼玉

藤倉桂

産土に残る大木桐の花

千葉

若土裕子

憂き日々をしばし忘れん藤の花

千葉

谷口正人

鹿の子の眼行き交ふマスク映しけり

千葉

谷口正人

どたばたのコロナ対策明け急ぐ

千葉

池田祥子

百年の太き根のはる牡丹かな

千葉

麻生十三

髪洗ふ釣舟草を揺らしつつ

東京

岡恵

茅花まだ薄紅色や風の中

東京

岡恵

拳骨は父豆飯は母の味

東京

神谷宣行

青葉木菟日々人間を探求す

東京

神谷宣行

大鍋に蛸はなやかに茹で上がり

東京

西川遊歩

人類の流れるプール昭和の日	東京	西川遊歩
七階の点滴に來よ夏の蝶	東京	長井亜紀
濃き淡き山の闇夜が縮布に	東京	長井亜紀
するすると冷汁三杯胃袋に	東京	長井亜紀
衣更え袖も通さぬ服あまた	東京	長尾貴代
紫陽花やころがり走るマルチーズ	東京	楠原正光
石楠花はたそがれどきがよく似合ふ	東京	楠原正光
木苺を摘んで帰りしこの道を	東京	楠原正光
ベビーカー添ひつ離れつ夏の蝶	東京	堀越としの
ひなげしや峯なほ白き八ヶ岳	東京	櫻井滋
三千歩めやすは土手の花苺	神奈川	遠藤初恵
江ノ島の裏は荒磯箱眼鏡	神奈川	金澤道子
サーフボード抱へて古稀となりにけり	神奈川	金澤道子
留守番や開ければ灯る冷蔵庫	神奈川	三玉一郎
純白に散り敷く夢を山法師	神奈川	松井恭子

枇杷たわわ他人事なれど一大事	神奈川	松井恭子
新緑やカーテン一気に開けるべし	神奈川	松井恭子
花柄の杖引く人も薔薇の中	神奈川	水篠けいこ
はつ夏の磯の小石を文鎮に	神奈川	中丸佳音
本堂の縁借り申す目に青葉	神奈川	中丸佳音
オリンピックカウンタダウン五月闇	神奈川	湯浅菊子
筍をどつさりいれて炊飯器	神奈川	那珂侑子
筍は茹でて半分お返しとす	神奈川	那珂侑子
首曲げて斜めにあこぎ羽抜鶏	神奈川	片山ひろし
一面に植田かがやいてゐるドライブ	新潟	安藤文
ふらここにはるかな日々の記憶あり	富山	酒井きよみ
一人去り二人去りふらここに一人	富山	酒井きよみ
豌豆摘みつ話す烏賊釣り漁のこと	石川	花井淳
母の長きながき独り居水中花	石川	松川まさみ
野心もて一句に向かふ夏初め	長野	金田伸一

一年をおきて「封切る新茶かな	長野	金田伸一
田に川に端然とあり五月空	長野	大島一馬
ポストに音卯の花茎に空洞	長野	柚木紀子
この森にるりたては蝶おりし日日	岐阜	古田之子
風薫る連句のやうにアンソロジ―	岐阜	三好政子
さつぱりと夢を忘れし昼寝寛	岐阜	梅田恵美子
優柔不断なところ大好き更衣	愛知	白杵政治
父訪へば笑顔たふとし麦の秋	愛知	宗石みずえ
金色の麦刈るひとり空見上ぐ	愛知	服部紀子
アフガンの奇跡の麦もきんいろか	愛知	服部紀子
手を入れて庭の草木の梅雨入かな	愛知	野口優子
牛も啼かん祭中止の空しさに	京都	佐々木まき
夜濯やけふの憂きことけふ捨てん	京都	佐々木まき
睡蓮にモネの心を覗くかに	京都	佐々木まき
子どもの日ひとりとなりし母訪はな	大阪	安藤久美

弟に折りし兜を飾りけり	大阪	木下洋子
いちびりは今も変はらず柏餅	大阪	木下洋子
若葉には若葉の葉擦れ山の寺	大阪	齊藤遼風
肥の国は青葉時雨の中にあり	大阪	齊藤遼風
海鳴りに背骨まつすぐ紺浴衣	兵庫	魚返みりん
冷蔵庫背高く白くどつかりと	兵庫	天野ミチ
夏潮や錨泊船の向き変る	兵庫	高見正樹
花樽鳥に混じりて嬰の声	奈良	喜田りえこ
明易や海界越ゆる死者の声	奈良	喜田りえこ
濁り水すくと出でたる菖蒲の芽	奈良	田原春
薔薇園や主の長靴先に立ち	奈良	田原春
奠供山ひとときは青き立夏かな	和歌山	玉置陽子
薬玉や嬰に持たせる五色の緒	和歌山	玉置陽子
南無阿弥陀仏真つ二つなる大ミミズ	岡山	齋藤嘉子
梅雨寒や昼の風呂でもたてやうか	香川	丸亀葉七子

父と子がヨットで志度寺参りかな

香川

丸亀葉七子

変異株育つ卯の花腐しかな

長崎

ももたなおよ

袋掛民主主義つて面倒な

大分

山本桃潤

ひもすがら鳶は輪を描きこどもの日

大分

竹中南行

若き日や中也に挟む庭石菖

鹿児島

大西朝子

学友の墓へと続く楠若葉

鹿児島

大西朝子

つらつらと二年の無沙汰詫ぶ遅日

フランス

廣瀬玲子

五月三十一日号

【特選】

蛾の歩く音とどろけり夜の障子

福島

渡辺遊太

覚えある香りをひらく扇かな

神奈川

金澤道子

老いらくの凡そ見ゆる冷奴

神奈川

三浦イシ子

万緑やシヨパンのワルツ高らかに

新潟

安藤文

畝立てて五月の土を香らす

長野

金田伸一

この星を一廻りして昼寝覚

愛知

稲垣雄一

蚊帳吊つて母の記憶の底に寝る

愛知

稲垣雄一

梅雨入りに従ふほかはなけれども

大阪

高角みつこ

ビー玉の割れてみて夏まひる

兵庫

魚返みりん

【入選】

リラ冷えやジャズを聴きたる店も消ゆ

北海道

柳一斉

石楠花や雨の峠を明るうす

北海道

柳一斉

リモートの句会活況行々子

岩手

川村杏平

掌のウイスキーボンボン夏来る

宮城

長谷川冬虹

みちのくの闇の深さよ牛蛙

埼玉

園田靖彦

新玉ねぎ光ひとつを包丁す

埼玉

上田雅子

病む夫に歩み合わせて茅の輪かな

埼玉

藤倉桂

鴉三羽組んず解れつ梅雨に入る

埼玉

藤倉桂

閉店の知らせ貼り付け梅雨に入る

千葉

芦野アキミ

白山の遥かに白し衣更

千葉

若土裕子

夏季五輪やるやらぬや梅雨に入る

千葉

谷口正人

認知症母のレシピの夏サラダ

千葉

麻生十三

アスパラガスを立てさせておきぬ青嵐

東京

岡恵

文庫本指を葉に昼寝かな

東京

神谷宣行

音の出で破顔草笛練習生

東京

西川遊歩

吾妻は猫かも知れぬ昼寝覚め

東京

西川遊歩

私から始まる世界天瓜粉

東京

西川遊歩

川釣りに自慢の蚯蚓持ち寄りて

東京

楠原正光

親鳥の出では入りては嚙に虫

東京

畠山奈於

歩を止めて山の音聴く雲の峰

東京

堀越としの

雨にまだ濡れてをらぬか雨蛙

神奈川

越智淳子

家籠り長きに届く新茶かな

神奈川

遠藤初恵

今ならばまだ引き返せると柚子の花

神奈川

遠藤初恵

羅や強情つ張りは昔から

神奈川

金澤道子

二時間のランチクルーズ藍浴衣

神奈川

金澤道子

梅雨めくや大あくびして旅かばん

神奈川

三浦イシ子

ワクチンの予約漸く菖蒲の湯

神奈川

水篠けいこ

梅雨寒や一枚五円レジ袋

神奈川

水篠けいこ

煮返して伽羅路母の味となり

神奈川

水篠けいこ

みどり射すマスクの下の汝が微笑

神奈川

中丸佳音

一からまた数へ直すや目高の子

神奈川

那珂侑子

取り出せば母の色の箱に残る

神奈川

片山ひろし

渋滞の列を横切る夏の蝶

新潟

安藤文

コロナ禍にしみじみと酌む梅酒かな

新潟

安藤文

初蝶や さつと水吸ひ すつと消ゆ

新潟

山田新一

新緑に身の染まりゆく朝の道

石川

岩本展平

父遠し五十回忌の新茶汲む

石川

岩本展平

気のつけば老後を生きて冷奴

石川

松川まさみ

梅雨茸やまた海汚す謀りごと

石川

松川まさみ

春蟬や深山いよいよ沈黙す

長野

大島一馬

赤き月ついそこにあり夏野かな

長野

大島一馬

パイプオルガン汗ミサ莊嚴に

長野

柚木紀子

梅雨の空国衰へて民噤む

岐阜

三好政子

瑠璃とかげ振り返りつつ走りゆく

岐阜

梅田恵美子

飛ぶ気など毫ほどもなし残り鴨

愛知

臼杵政治

腹に風邪に現の証拠や祖母おはす

愛知

宗石みずえ

四十雀今朝は一羽で庭におり

三重

乾薫

嘘まじりの作文褒められ振花

京都

吉田千恵子

紅薔薇の紅の日疲れ風疲れ

京都

佐々木まき

薔薇大輪城のくずるることく散る

京都

佐々木まき

軸探す蔵に見つけし梅酒かな

京都

氷室葉胡

少年のつむじ渦巻く大昼寝

大阪

高角みつこ

ワクチンの予約は取れず夏来たる

大阪

内山薫

冷奴自由と孤独愛すかな

大阪

木下洋子

緑の実残し花袖ははらと散る

大阪

澤田美那子

鱈たててからりと揚がる鬼虎魚

兵庫

加藤百合子

星砂の小瓶に透ける夏日かな

兵庫

魚返みりん

風薫るいづこの窓も干し布団

兵庫

天野ミチ

マーガレット今日はとことん遊ぶ日に

兵庫

藤岡美恵子

月山の水を讀へよ青田風

奈良

喜田りえこ

佃煮の醬油の匂ひ梅雨夕焼

奈良

田原春

芳しき泥浴々と代田かな

和歌山

玉置陽子

口ぐせは貧乏暇なしをけら焚く

香川

丸亀葉七子

生きすぎと思ふ倅せ更衣

香川

曾根崇

傷痕につい手の伸びる走り梅雨

香川

曾根崇

祖母の衣母の衣接ぎ盆の衣

長崎

ももたなおよ

畳紙に羅のなき如くあり

長崎

ももたなおよ

抽斗の着物気楽に着て薄暑

長崎

ももたなおよ

がぼりがぼり不満あるらし泉かな

大分

山本桃潤

生姜と葱のせて高々冷奴

大分

山本桃潤

誹謗去れ批評は来れ紅薔薇

大分

竹中南行

離縁して朝寝朝風呂五月富士

鹿兒島 大西朝子

退職の友より届く新茶かな

フランス 廣瀬玲子

六月十五日号

【特選】

たまさかや地球に降りて草むしり

北海道 芳賀匙子

炎ゆる砂一粒としてわれのあり

福島 渡辺遊太

梅雨入りや視線の外の注射針

神奈川 松井恭子

今去りし人をこころに夕端居

石川 松川まさみ

夏霧はしづかな巨人村に入る

岐阜 夏井通江

われらまたかの学舎に端居せん

京都 佐々木まき

草引くや草の生命を羨みつ

和歌山 玉置陽子

水路ならぬ水路分け入り蓮見舟

香川 曾根崇

木漏れ日にくすぐられては実梅落つ

長崎 ももたなおよ

【入選】

死よりなほ秘やかにあり蟻地獄

福島 渡辺遊太

昼寝覚めいつもの部屋に戻りけり

埼玉 上田雅子

眉鼻胸糸の背丈や風薫る

千葉 芦野アキミ

交わりの声の涼しき句会かな

千葉 池田祥子

楊梅は雌雄がありて恙なし

千葉 麻生十三

夕立に濡れて別れるみぎひだり

千葉 麻生十三

山椒煮る清酒ぐらつと煮立たせて

東京 岡恵

夏インドカナリヤ集まる宿の庭

東京 長尾貴代

友達と一日遊びし夏の川

東京 楠原正光

防波堤影一つ無き暑さかな

東京 楠原正光

もちずり草一本嬉し散歩道

東京 畠山奈於

読みかけのフアンション雑誌みたいに蛾

東京 齊藤拓

紅みどり黄いろそれぞれ酸きすもも

神奈川 伊藤靖子

一滴を待つ間豊かや新茶汲む

神奈川 遠藤初恵

反抗期しづかに泳ぎあたりけり

神奈川 三玉一郎

もう休んでと四百歳の実梅もぐ

神奈川 松井恭子

内緒話蜜袋に入れておく

神奈川 中丸佳音

われ病みてゐる間に燕巢立ちけり

神奈川 那珂侑子

短夜の闇を揺らして救急車

神奈川 片山ひろし

火口湖に鳥居のありて明易し

神奈川 片山ひろし

ひと夏の恋となりけり麦酒飲む

新潟 安藤文

新聞に吾が句を採す玉の汗

新潟 安藤文

指の間をすり抜けて行く植田風

石川 花井淳

自転車で飛び込みし川虫来よ

石川 花井淳

立葵生家の土間のこの匂ひ

石川 密田妖子

婿となるお人笥掘ってください

長野 柚木紀子

清らかな夏の田続く車窓かな

岐阜 夏井通江

麦藁で初めて飲みしコーラかな

岐阜 三好政子

振分けの玉葱の束軒占めて

岐阜 三好政子

風抜けて行く麻編みの夏帽子

岐阜 三好政子

皮むけばさらにびわ色枇杷を食ふ

愛知 稲垣雄二

コンビニの裏手の川も蜜狩

愛知 宗石みずえ

慎ましき庭に咲きたる夏あざみ

愛知 野口優子

空白なき次男の予定青嵐

京都 吉田千恵子

平面図に伐採の印夏の庭

京都 吉田千恵子

無理に弾ます父との会話夜釣

京都 吉田千恵子

ほがらかに神もまじりて茅の輪結ふ

大阪 安藤久美

今年こそ新茶のうちに頂かむ

大阪 内山薫

ワクチンのニュース続くや豆の飯

大阪 木下洋子

生ごみを埋めしあたり花南瓜

大阪 澤田美那子

さはあれど無口がよろし竹婦人

大阪 澤田美那子

「お互いにお一人様ね」パイナップル

兵庫 魚返みりん

黒南風やワクチン接種の長き列

兵庫 千堂富子

隣とは少し間を置く額の花

兵庫 千堂富子

自由にして孤独愛せり臺

岡山 齋藤嘉子

やまももは故郷の八幡さまの味

香川 丸亀葉七子

田舎家のあの涼しさの懐かしき

香川 曾根崇

青梅を貰ひ楽しむ梅仕事

長崎 ももたなおよ

コロナ禍や蛸螭に塩てんこ盛り

鹿児島 大西朝子

六月二十日号

【特選】

飛ぶよりも歩くのが好き天道虫

岐阜 古田之子

一生はさよならばかり傘雨の忌

大阪 齊藤遼風

ひと粒の青山椒の忿怒かな

和歌山 玉置陽子

声がまづ若返りたり更衣

香川 曾根崇

【入選】

紫陽花の蒼を深めて昨夜の雨

北海道 村田鈴音

ばらけ飛ぶ鳥追ふ鳥梅雨夕焼

北海道 芳賀匙子

郭公や牧場の朝の静けさに

北海道 柳一斉

枇杷熟るる福なほ遠き福島よ

宮城 長谷川冬虹

妻の留守七難七福冷し酒

宮城 長谷川冬虹

火蛾二匹音なく羽根を打ちあへる

福島 渡辺遊太

鰯口振つて詩の神呼ばふ若葉かな

福島 渡辺遊太

よりそへばこころひらきぬ月見草

埼玉 園田靖彦

ワクチンの列ながながと梅雨入かな

埼玉 上田雅子

紫陽花の色のブラウス退院す

千葉 芦野アキミ

金魚鉢ぬうつと覗く目が二つ

千葉 菊地原弘美

老鴛の林をぬけて退院す

千葉 若土裕子

石垣のここに今年も蛇の衣

千葉 若土裕子

紫陽花の盛り過ぎれば無残なり

千葉 池田祥子

落ち落ちて今日を急ぐや凌霄花

千葉 池田祥子

かつて島マンモス歩く雲の峰

千葉 池田祥子

子雀や日暮れてここは丸の内

東京 岡恵

父の忌や父の香りの古扇

東京 岡田栄美

炎天やペンキ剥がれし勝鬨橋

東京 岡田定

母の琴母校へ寄贈鉄線花

東京 西川遊歩

骨に皮へばりつきたる涼しきよ

東京

長井亜紀

魂が透けて涼しきレントゲン

東京

長井亜紀

泳ぎきて砂浜遠くただよえり

東京

楠原正光

時鳥いつしか多摩に五十年

東京

畠山奈於

百日紅ますます奔放碧天に

東京

堀越としの

近づけば寄りくる金魚夜明け前

神奈川

伊藤靖子

波去りて跡なき浜を行く素足

神奈川

伊藤靖子

青梅の落ちたばかりのきれいさよ

神奈川

越智淳子

父と子と同じ格好の昼寝かな

神奈川

遠藤初恵

麦茶湧く昭和96年の朝

神奈川

遠藤初恵

七月や紅茶に浮かべミントの葉

神奈川

金澤道子

梅雨の蝶なんぢやもんぢやは大きな木

神奈川

金澤道子

饅頭を供へられたり大昼寝

神奈川

三玉一郎

島ひとつ崇めて大き茅の輪かな

神奈川

松井恭子

浅草に蜜豆を食べ別れしが

神奈川

中丸佳音

兄の余命幾ばくもなし雲の峰

神奈川

土屋春樹

家売つて家財整理しあら涼し

神奈川

湯浅菊子

ひとり居や大きな家の枇杷熟るる

神奈川

那珂侑子

よくはねるものから選りて囃鮎

神奈川

片山ひろし

挽きたてのコーヒーの香や青あらし

新潟

安藤文

しめやかにピアノ弾く母朝太郎忌

新潟

安藤文

姉の雪山妹の夏山かき氷

富山

酒井きよみ

かき氷さいしょの匙の入れどころ

富山

酒井きよみ

こぼれたる新茶擦り込む手の甲に

石川

岩本展平

こともなく針穴に糸涼しき目

石川

岩本展平

夜濯やしばらく水を手にうけて

石川

松川まさみ

憎らしき銭苔の花今盛り

石川

密田妖子

夏至の日や地球正しく宙にあり

長野

大島一馬

上顎にはカマンベールチーズ病棟ははる嵐

長野

柚木紀子

夏の雷人清めをり楸邨忌

岐阜

夏井通江

田を植ゑて緑の世界に立ちつくす

岐阜

夏井通江

紫蘇揉みし手いつまでも塩の味

岐阜

古田之子

滝裏へ飛び込んでいく岩燕

岐阜

古田之子

枇杷食めば種からからと転がりぬ

岐阜

梅田恵美子

二回目の接種終わりぬソーダ水

岐阜

梅田恵美子

婿となる身丈確かむ白緋

愛知

宗石みずえ

風運ぶ遠き氷河の溶ける音

愛知

服部紀子

梅雨晴や山を眺めてふとん干し

三重

乾薫

早起きを言い訳にして昼寝かな

三重

乾薫

噴水の天辺水の遊びをり

京都

氷室葉胡

冷酒や旅の終はりのただちや豆

大阪

高角みつこ

真つ黒を笑はれてゐるバナナかな

大阪

内山薫

風鈴や好きな一句を吊り下げん

大阪

澤田美那子

滴りの涸れんとするを一雫

兵庫

加藤百合子

黒蛇は哀し神之使者ならず

兵庫

福田光博

海原へ落とすバナナの皮と恋

和歌山

玉置陽子

しやんとさす夏瘦の身や水飲んで

岡山

齋藤嘉子

二番草取りをへし朝出征す

岡山

齋藤嘉子

恋の文ほたるぶくろに仕舞ひけり

香川

丸亀葉七子

蠅虎に猫あそばれてをりにけり

香川

丸亀葉七子

ハンカチに埋もれてアベノマスクかな

長崎

ももたなおよ

海ぶだう含めば苦し慰霊の日

長崎

川辺酸模

網干して眠る一村慰霊の日

長崎

川辺酸模

昼は畑夕は港に鱒を釣る

大分

竹中南行

七月十五日号

【特選】

夜風鈴托鉢僧の居る如し

東京

杜野廉司

新涼やスカイツリーが屋根の上

東京

楠原正光

大昼寝この世の声が聞こえけり

神奈川

三五一郎

引力のここに集まる大瀑布

石川

花井淳

初蟬を聞く産声を聞くごとく

石川

岩本展平

夏の月石またぬくくうづくまる

岐阜

夏井通江

羽拔鶏未来を見つめてゐるところ

岐阜

夏井通江

涼しさや無より現はれ石の庭

大阪

安藤久美

袋掛桃のうたたね始まりぬ

和歌山

玉置陽子

珊瑚礁映して眠るサングラス

長崎

川辺酸模

草を取るこんな時間を待っていた

大分

山本桃潤

土用鰻俳句作るも力技

大分

山本桃潤

【入選】

一人来てまた二人来て夜焚釣

北海道

高橋真樹子

切り詰めし夏の暮らしや花手水

北海道

芳賀匙子

郭公や牧場は未だ目覚めざり

北海道

柳一斉

あらまほし冷奴のごといさぎよく

宮城

長谷川冬虹

冷奴百珍あれど極まれり

宮城

長谷川冬虹

産土の素肌にはやか青田風

福島

渡辺遊太

振花や誰かが捨てし夢の跡

茨城

馬場小零

新婚の新居に早もあぶら虫

埼玉

園田靖彦

産土のあの日にもどらん籠枕

埼玉

園田靖彦

主のゑごとく蔵書や黴匂ふ

埼玉

上田雅子

遠く来て哀れ百円バナナかな

埼玉

上田雅子

グロリオーサ競いて咲きぬ梅雨の庭

埼玉

上田雅子

セロハンの翅震はせて兜虫

埼玉

藤倉桂

誰もぬ誰も来ぬ午後百日紅

埼玉

藤倉桂

雪解けてアカチンの膝小僧たち

千葉

芦野アキミ

懐かしきもの悉く黴の華

千葉

若土裕子

初恋やふはふは積もるかき水

千葉

若土裕子

銀漢や夫の残せし旅かばん

千葉

若土裕子

青春や図書室の窓夏木立

千葉

谷口正人

大谷が投げ打ち笑ふ梅雨あがる

千葉

谷口正人

島の子の岩飛ぶ遊び土用波	千葉	池田祥子
故郷の黒酢の届く土用かな	千葉	池田祥子
籐椅子にゐて再会の旅の夢	千葉	池田祥子
トマト胡瓜さくらんぼ茅の輪潜りけり	東京	岡恵
釣忍揺らして時を戻しけり	東京	岡恵
戦争のなくて人死ぬ大暑かな	東京	神谷宣行
翡翠やコバルトブルーの炎立つ	東京	西川遊歩
今年こそ銀座へ行こう薄衣	東京	長尾貴代
冷そうめん父とふたりの不登校	東京	長尾貴代
泰山木の花のやうなる人娶る	東京	畠山奈於
農協のキャベツ抱きてよろめきぬ	東京	堀越としの
子ら声を潜めよ合歓の花の下	神奈川	越智淳子
ハイビスカス蕾あまたの鉢買はん	神奈川	越智淳子
咲きさうな蒼がひとつ水中花	神奈川	金澤道子
鈍行や時間だけある夏休	神奈川	三玉一郎

きみはまだきみを知らない藍浴衣	神奈川	三玉一郎
規格外胡瓜一筈二百円	神奈川	水篠けいこ
田水沸きどぜうぎにがに逃げ隠れ	神奈川	土屋春樹
大菩薩尾根を越えれば雲の峰	神奈川	土屋春樹
兄弟の留守番の午後心太	神奈川	湯浅菊子
夫すこし若く見えたり半ズボン	神奈川	那珂侑子
白玉やさらりと嘘をつくをんな	神奈川	片山ひろし
大喧嘩のあとの静けさソーダ水	新潟	安藤文
おそろおそろの茅の輪をくぐる吾が子かな	新潟	安藤文
水はじき茄子は仔犬の声あぐる	石川	松川まさみ
青田風穂高の水の絶ゆるなき	長野	金田伸一
寂けさや聞こゆるこゑは新樹光	長野	柚木紀子
紅花のれんこん拡声器で正午を	長野	柚木紀子
黒揚羽雨のあいまをぬふて来し	岐阜	古田之子
梅雨激し人為の果ての土石流	岐阜	三好政子

水割りの氷涼しき江戸切子

岐阜

辻雅宏

京の人動かぬ鉾を見て帰る

大阪

澤田美那子

磨線のレールそのまま草いきれ

岐阜

辻雅宏

とにかくに今日まで生きて心太

大阪

齊藤遼風

よく生きて滲み・傷・破れ古団扇

愛知

稲垣雄一

絵唐津の露の音聞くマスクかな

大阪

齊藤遼風

一丁を二人で分けて冷奴

愛知

臼杵政治

氏神や名越の祓入念に

兵庫

加藤百合子

旅客機の斯くも行き交ひ梅雨明くる

愛知

宗石みずえ

噴水やみづさかさまに乱反射

兵庫

魚返みりん

空蟬や眠れ大樹に抱かれて

愛知

野口優子

梅雨出水地球も荒れて傷だらけ

兵庫

天野ミチ

棒読みの街頭演説炎天

京都

吉田千恵子

手に並べ小石の如き雹見せる

兵庫

天野ミチ

浴衣着て物憂きものに乳押さへ

京都

佐々木まき

トラノオや蝶訪ふたびに尾を振れり

兵庫

藤岡美恵子

虫干や母の恋の句見つけたる

京都

氷室葉胡

夾竹桃花の向こうに溶鉱炉

兵庫

高見正樹

呼鈴を掴んであたる蟬の殻

京都

氷室葉胡

葉の陰にでんと重たき胡瓜かな

奈良

田原春

百歳で一人暮らしや雲の峰

大阪

内山薫

蝸牛梢の先の空を見に

和歌山

玉置陽子

この年の祇園囃子を聞きに行く

大阪

木下洋子

無防衛な悪女の昼寝姿かな

香川

丸亀葉七子

ぎんどうの押し葉涼しき風を呼ぶ

大 阪

丸亀葉七子

木下洋子

抗ひつつ蛾のひかれゆく蟻の列

香川

曾根崇

蓴菜といふ味なくて旨きもの

大阪

澤田美那子

夏帽も我もくたびれをりにけり

香川

曾根崇

花南瓜雌花雄花に囲まるる

長崎

ももたなおよ

トンネルの先は黒潮雲の峰

長崎

川辺酸模

アメリカを真似続けてや冷奴

大分

竹中南行

風死せり京にどでんと東山

フランス

廣瀬玲子

七月三十一日号

【特選】

革靴は歩く焼きごて炎天下

東京

岡田定

無意識の森へ降りゆく熱帯夜

東京

西川遊歩

山百合のどさりと届き花開く

神奈川

伊藤靖子

香水を二滴覚悟決まりけり

大阪

木下洋子

藍浴衣藍の力を借りて逢ふ

兵庫

加藤百合子

炎帝や五輪の上にのしかかる

兵庫

天野ミチ

打ち水のおこぼれに咲く草の花

兵庫

藤岡美恵子

楸邸の夕焼けまでの大昼寝

奈良

喜田りえこ

青梧桐の蔭はみ出して三尺寝

香川

曾根崇

いさかひし昔恥づかし墓洗ふ

長崎

川辺酸模

【入選】

言い止しの言葉失う蚩かな

北海道

村田鈴音

蚊帳吊りて遊牧の民の記憶に

北海道

芳賀匙子

空以外何も無くなるゆだちかな

北海道

芳賀匙子

虹生れこの世の我を忘れをり

北海道

柳一斉

コロナ禍に君に届けし大鰻

宮城

長谷川冬虹

山中に日輪降りし睡蓮花

宮城

長谷川冬虹

がさつなる性は永劫羽抜鳥

福島

渡辺遊太

ナイフ研ぐ夏至の光の水注ぎ

福島

渡辺遊太

やゝ高きヒールを選りぬ今朝の秋

茨城

馬場小零

大花火佐渡で揚ぐれば弥彦でも

埼玉

園田靖彦

寅さんはトランクひとつ夜の秋

埼玉

園田靖彦

はるかより馬車駆る音や夏深く

埼玉

松本邦吉

軽トラに九段重ねし早苗床

千葉

芦野アキミ

垣根越青林檎のせ回覽板

千葉

菊地原弘美

ひと塩のきびなご旨き十用かな

千葉

池田祥子

玉虫の落ちて家居の夏終る

千葉

池田祥子

百歳の寝釈迎のごとき昼寝かな

千葉

麻生十三

古パナマ被れば父の顔となり

千葉

麻生十三

白南風やひやり重たき黄八丈

東京

岡恵

オリンピックテレビの前の爺昼寝

東京

森徳典

日の本に風の名二千矢車草

東京

西川遊歩

八月の大きな背中に乗りゆかん

東京

長井亜紀

からつぼの腹からつぼの冷蔵庫

東京

長井亜紀

花に射す日の色移る晩夏かな

東京

長尾貴代

涼風や一人寝のとき本を読む

東京

長尾貴代

洋上の船から望む遠花火

東京

楠原正光

根には根の争ひ見ゆる草むしり

東京

畠山奈於

かんなくず啜へて鶉の営巣す

東京

堀越としの

摘みたての茗荷の香る今朝の汁

神奈川

伊藤靖子

白頭のほかは赤銅夏の海人

神奈川

越智淳子

老いよいよ残りわずかや香水も

神奈川

遠藤初恵

土用波大技の板ひるがへり

神奈川

松井恭子

雹降つて野球の子らを散らしけり

神奈川

水篠けいこ

広げたる両手に余る夏の海

神奈川

水篠けいこ

ふつふつと胸にも泉湧くところ

神奈川

中丸佳音

梅干しや見ても聞いても身震いす

神奈川

土屋春樹

イタリヤの国旗の色に夏料理

神奈川

那珂侑子

我が家の縮図の如し冷蔵庫

神奈川

片山ひろし

宰相の言葉届かず秋の風

新潟

安藤文

混沌たるこの世の底より虹立てり

新潟

高橋慧

雲水に道果てしなし雲の峰

富山

酒井きよみ

蛤の砂抜かれるる夕涼し

石川

岩本展平

夕焼けや口笛の人後ろから

石川

密田妖子

一人分胡瓜を揉みて胡瓜食む	石川	密田妖子
すさまじきナラ枯れの山夏座敷	山梨	小泉雅恵
散策は明日もこの道稲の花	長野	金田伸一
宙つつまむ宙につつまれむ水芭蕉	長野	柚木紀子
アイスティー庭のミントを摘んできて	岐阜	夏井通江
夜に干す白衣と下着夏遍路	愛知	稲垣雄二
また一人仮面を外す木下闇	愛知	稲垣雄二
背泳ぎやだんだん空が近くなる	京都	氷室葉胡
今はもう誰も咎めぬ昼寝かな	京都	氷室葉胡
百年に一度の暑さ荒神輿	大阪	安藤久美
呆然と人も大樹も夕立かな	大阪	高角みつこ
差し出せば子は泣き出せり蝉の殻	大阪	内山薫
競技場蟬が囀してゐるばかり	大阪	木下洋子
ワクチンを打つて涼しき夕べかな	大阪	木下洋子
朝食の窓朝顔の裏ばかり	大阪	澤田美那子

ハンドルに長き足乗せ三尺寝	大阪	齊藤遼風
蛸鱸の遠き歩みを楽しめり	大阪	齊藤遼風
街白夜ああ月がない星がない	兵庫	魚返みりん
街を行くわが影もなき暑さかな	兵庫	千堂富子
おまじない覚えたてなる茅の輪かな	兵庫	藤岡美恵子
山の寺閨に下がりし瓢かな	兵庫	福田光博
初秋や展示の変わる美術館	兵庫	高見正樹
選びたる魚目百句の涼しさよ	奈良	喜田りえこ
半世紀前は新妻レース編む	和歌山	玉置陽子
とくろ巻く蝮もをるぞ蚩狩	岡山	齋藤嘉子
銀漢や二峰崩れし五剣山	香川	曾根崇
奥祖谷の炭焼きし跡青胡桃	香川	曾根崇
夏の月波に曳かるる砂の音	大分	竹中南行
仏壇は熟るるバナナの香に満ちて	鹿児島	大西朝子
毛虫焼くステロイド剤光る腕	フランス	廣瀬玲子

八月十五日号

【特選】

ばばさまの乗りこなしたり茄子の馬	東京	神谷宣行
メコン河の秋水萍の来ては去る	石川	花井淳
ひとつずつ木の実手にして別れけり	石川	岩本展平
蝉声のなかひと筋の法蟬蟬	大阪	澤田美那子
西日照り命のかぎり女哭く	兵庫	魚返みりん
敗戦日杭一本の墓標かな	奈良	喜田りえこ
【入選】		
風鈴の音にしばらくペンを置き	北海道	柳一斉
打つ手なくコロナ第五波敗戦忌	宮城	長谷川冬虹
人去りて言葉残りぬ水中花	福島	渡辺遊太
箱庭や産湯の家と喪の家と	福島	渡辺遊太
真二つや無花果の裸身美しき	埼玉	上田雅子
飼育ケース並ぶや十個夏休み	埼玉	藤倉桂

新涼の翼を広げ浅間山	千葉	若土裕子
油蟬近く日ぐらし遠くから	千葉	谷口正人
敗戦忌母の遺品に引揚証	千葉	池田祥子
床下を風吹きぬけて夏の家	千葉	麻生十三
カナカナや独り住まひの門の内	東京	岡恵
秋めくや一品多し夕ごはん	東京	岡田栄美
道なりに花売りのロバ秋に入る	東京	岡田栄美
人の世の片蔭にゐて寿	東京	神谷宣行
秋刀魚食ふ母の必死やまだ生きる	東京	神谷宣行
レナウンのワンサカ娘秋が来た	東京	長井信彦
初蟬を聞くやたちまち蝉しぐれ	東京	杜野廉司
手火花や遊びし日々の友の顔	東京	楠原正光
三度巢に育つ子燕駅舎の壁	東京	島山奈於
大きくさは隣家の主人今朝の秋	東京	堀越としの
月光に冷たく光る五つの輪	東京	櫻井滋

神様の退屈凌ぎ野分かな

東京

齊藤拓

降りつづく闇夜の底に鉦叩き

神奈川

伊藤靖子

夏休み熱いトマトにかぶりつき

神奈川

遠藤初恵

八月の道に小石の照り返し

神奈川

遠藤初恵

父の忌を修し風鈴外しけり

神奈川

金澤道子

静寂の記憶八月十五日

神奈川

三玉一郎

爆弾抱へ死ぬる訓練父の夏

神奈川

松井恭子

読みさしの本めくる風秋に入る

神奈川

松井恭子

閉幕のアンツーカーに秋の雨

神奈川

水篠けいこ

炎天や落し物して齡増ゆ

神奈川

中丸佳音

遠雷をうきうきと待つ心あり

神奈川

中丸佳音

飢えに飢えフスマを食くす敗戦忌

神奈川

土屋春樹

テレビ観戦終りて我の夏終る

神奈川

那珂侑子

荒れ川の築に追ひ込む藻屑蟹

神奈川

片山ひろし

夕立にさつと濡れゆくランナーよ

新潟

安藤文

今年また一家揃はぬお盆かな

新潟

安藤文

深閑と泉の底に深き空

新潟

高橋慧

冷まじや障碍者てふ言葉あり

新潟

高橋慧

ひと雨の来て秋草となりにけり

石川

岩本展平

ややありて音も終ひの遠火花

石川

松川まさみ

蛸の輪唱の波森は海

石川

密田妖子

西瓜食ふ昼は測らぬ血糖値

長野

金田伸一

どこをどう来るや枕辺の飛蝗

長野

金田伸一

終戦日音くぐもれる真空管

長野

大島一馬

蜻蛉のすいと行き来す今昔

長野

大島一馬

己すませば天高く不可思議

長野

柚木紀子

草原の香の香水をまとひ寝ん

岐阜

夏井通江

雨の輪や鯉の緋色の揺れてをり

岐阜

古田之子

点さねば父母まよふ門火かな

岐阜

梅田恵美子

お大師が背にへばりつく夏遍路

愛知

稲垣雄二

水撒けば小さな虹や原爆忌

愛知

稲垣雄一

空蟬や隣りはすでに墓しまひ

長崎

もまたなおよ

路面電車の細きホーム炎天

京都

吉田千恵子

義兄死すしばし泣かせよ秋の風

長崎

川辺酸模

墓洗ふお山の水で何杯も

京都

佐々木まき

今もなほいくさは止まづ敗戦日

大分

山本桃潤

代筆とある友の文秋の声

京都

氷室葉胡

組の音に八月六日明く

大分

竹中南行

大文字の今宵の空のひろびろと

大阪

安藤久美

瓜の馬役目を終へて門の陰

鹿児島

大西朝子

八月や木叢草叢疲れそむ

大阪

高坂泰子

夕風の坂は蘭盆勝会かな

フランス

廣瀬玲子

賑やかに帰ってくるらん魂迎

大阪

澤田美那子

八月三十一日号

大阪に飽きて京都や鱧の皮

大阪

齊藤遼風

めなに目指し歩みし道や敗戦忌

福島

渡辺遊太

夕べより嫉みの雨よ恋の星

兵庫

加藤百合子

原爆忌浜に木の骨貝の骨

福島

渡辺遊太

初めての火傷に泣けり庭花火

兵庫

藤岡美恵子

救急車行きどころなき秋の暮

東京

櫻井滋

砂浜に見ゆる人影良夜かな

兵庫

高見正樹

へうたんに酌みても尽きぬ酒やある

富山

酒井きよみ

迎え火や軍靴の父の蚤しらみ

奈良

喜田りえこ

鱗雲この長身を横たへん

石川

花井淳

好物の芋と南瓜を菰筵

奈良

喜田りえこ

落ち蟬の残る命を塵取りへ

石川

密田妖子

秋高しまだ純白のユニフォーム

岡山

齋藤嘉子

そそくさと踊る阿呆になりに行く

京都

佐々木まき

かじられて脛も細りぬあつぱつぱ

香川

丸亀葉七子

蘆刈の姿のままに老ゆるかな

大阪

澤田美那子

ゆつくりとこの世眺めむ秋簾

和歌山 玉置陽子

生身魂家震はするうがい声

フランス 廣瀬玲子

何の服も似合はぬ合はぬ残暑かな

北海道 芳賀匙子

炎帝やなほ濁流の最上川

宮城 長谷川冬虹

古道てふ径見え隠れ萩の花

茨城 馬場小零

大空の座標を探す蜻蛉かな

茨城 馬場小零

竹伐つて父母の花筒取り替へん

埼玉 園田靖彦

腐れ縁すばりと断ちて新生姜

埼玉 園田靖彦

焦げるまで網に転がし茄子かな

埼玉 上田雅子

看取られぬ死者巾はん星月夜

埼玉 上田雅子

新涼や滴るほどに化粧水

埼玉 藤倉桂

仕舞湯やまだ拙くて虫の声

埼玉 藤倉桂

七日ずつ薬揃えて夏果つる

千葉 芦野アキミ

一人膳かすかに祭り囃子かな

千葉 芦野アキミ

大風の揺さぶる青き蜜柑山

千葉 若土裕子

新豆腐食の細りし母に先ず

千葉 若土裕子

大家族支へし母の南瓜かな

千葉 池田祥子

秋めくと頷き合へる鯉泥鰌

千葉 池田祥子

全体重押しつけて切る大南瓜

東京 岡田栄美

盆過ぎて富士が一気に迫りくる

東京 神谷宣行

十のうち九本は曲がり胡瓜かな

東京 長井亜紀

誘蛾灯死ぬとも知りて落ちる恋

東京 長井亜紀

放課後のドッジボールやうろこ雲

東京 楠原正光

移住せし夫婦は若し新豆腐

神奈川 越智淳子

手をつけぬ緋いつびき秋きざす

神奈川 金澤道子

満身にひしとまつはる残暑かな

神奈川 三浦イシ子

水に濡れ光に濡れて新豆腐

神奈川 三玉一郎

羽拾ふ九月の空のいづくより

神奈川 松井恭子

一木を覆う葛の葉葛の蔓

神奈川 水篠けいこ

源流に片手を浸し夏惜しむ

神奈川 中丸佳音

瑠璃蜥蜴褒むれば墓の裏側へ	神奈川	中丸佳音
一匹となりし目高の残暑かな	神奈川	那珂侑子
広告のはや節料理秋暑し	神奈川	那珂侑子
つぶやきが飛び交つてゐる夜長かな	新潟	安藤文
揺れながら子蜘蛛を狙ふ子かまきり	新潟	高橋慧
足裏を崩るる砂も秋の海	新潟	高橋慧
未成りと思つてゐしが大瓢	富山	酒井きよみ
白山から芒つたひに下りけり	石川	花井淳
それぞれに笑顔を向ける木の実かな	石川	花井淳
目のかすむ病を得たり秋の空	長野	金田伸一
かすむ目にパラリンピック熱き秋	長野	金田伸一
蟋蟀に大地確と共鳴す	長野	大島一馬
秋桜は秋桜然と戦きおり	長野	大島一馬
白昼夢たれコロナも星降る白夜とか	長野	柚木紀子
向日葵や悪の扉を開けし者	岐阜	古田之子

迢空の小暗き道や仙翁花	岐阜	三好政子
朝顔の鉢植々膝に車椅子	岐阜	辻雅宏
三十のバケツ田並ぶ豊の秋	愛知	稲垣雄二
鯊釣や隣の浮きをまた引きて	愛知	臼杵政治
つましくも己が内なる玉祭り	愛知	青沼尾燈子
大丈夫といふ無責任藪からし	京都	吉田千恵子
藤寝椅子死にゆくときはこの上で	京都	佐々木まき
爽やかや草木の名札ごとに和歌	京都	氷室茉胡
晩年は一日長し酔芙蓉	京都	氷室茉胡
恐竜の孵化ゆつくりと熱帯夜	大阪	安藤久美
冷や奴今日で納めとお思いしが	大阪	高坂泰子
定年後の長きに憂ふ晩夏かな	大阪	内山薫
ひとときはに鮭なまぐさき残暑かな	大阪	内山薫
猛然と食うて太りて芋虫よ	大阪	澤田美那子
藍浴衣母の乳房のうすきこと	大阪	齊藤遼風

苦瓜の憤怒の種の熟したる

兵庫

加藤百合子

蝸や十秒ほどのそれつきり

兵庫

加藤百合子

うつし世の夜を明るく盆の月

兵庫

加藤百合子

星月夜兄の形見のオルゴール

兵庫

千堂富子

日が暮れて心底嬉しき残暑かな

兵庫

天野ミチ

弟に少し小さく瓜の馬

兵庫

藤岡美恵子

この大樹ひぐらしの木と名付けたり

兵庫

藤岡美恵子

祇園会の生ぬるき風京の風

兵庫

福田光博

盆踊り妻のまぎれて帰り来ず

奈良

喜田りえこ

テーブルの秋の二草朝ごはん

奈良

田原春

新涼やワルツのやうに踏みミシン

和歌山

玉置陽子

密やかな寢息香るや桃の箱

和歌山

玉置陽子

藪座蒲団ひとつ残りて法事果つ

広島

下田あつ子

苗木から育て酢橘の初成りぞ

香川

丸亀葉七子

ワクチンを打つも抽選秋暑し

長崎

ももたなおよ

敗戦日かつて眩しき民主主義

長崎

川辺酸模

敗戦日書棚に古ぶ墮落論

長崎

川辺酸模

敗戦日憲法前文今一度

長崎

川辺酸模

混沌のわれら何処へ秋の風

大分

竹中南行

九月十五日号

【特選】

カナクギの便りもうれし栗羊羹

宮城

長谷川冬虹

八月の祈りの初め広島忌

埼玉

上田雅子

両の目に病を得たり秋はじめ

長野

金田伸一

身に沁むやあらためて聞く子の齡

大阪

澤田美那子

凄まじきもののひとつに孫七人

大阪

齊藤遼風

颱風の大きく強くのろのろと

兵庫

天野ミチ

妻いまやはらからとなり衣被

大分

竹中南行

【入選】

飛沫上げ鮭の解禁鱗舞う

北海道

村田鈴音

灯台下はまなすの実の赤々と

北海道

村田鈴音

もらひ受く根ごと土ごとをみなへし

北海道

芳賀魁子

今朝の秋珈琲の香の戻りくる

北海道

柳一斉

妻つくる秋の彼岸の豆ごはん

岩手

川村香平

仲直り妻へ麦茶と水羊羹

宮城

長谷川冬虹

亡骸に紅ひく人や酔芙蓉

秋田

佐藤一郎

無花果の幼き青やみづみづし

福島

渡辺遊太

朝顔や一番乗りの野球場

茨城

袖山富美江

栗ようかん栗のあたりを包丁す

埼玉

上田雅子

グロリオーサ萎るる午後や敗戦日

埼玉

上田雅子

ハンカチにいろいろ秋の零れもの

千葉

若土裕子

すずかけの樹皮はがしゆく秋の風

千葉

若土裕子

忙しなき今日の終わりや虫の声

千葉

谷口正人

妻恋の露の柩となられけり

千葉

池田祥子

古書店の棚に差し込む秋陽かな

千葉

麻生十三

櫃の実は渋し煙の匂ひして

東京

岡恵

爪の上のせてもらひぬ夜光虫

東京

岡恵

秋の蚊よ生き永らへて何とする

東京

森徳典

猫いつか虹を渡りて猫のくに

東京

長井亜紀

新米や夜も操業精米所

東京

楠原正光

先駆けの鬼が飛び来る秋祭

東京

楠原正光

書を閉じて穏やかならぬ秋思かな

東京

堀越としの

つゆ草の二つ三つ咲く朝の道

神奈川

伊藤靖子

母が来て一緒に買った柿を買ふ

神奈川

伊藤靖子

身のかくも厚き秋鯖昆布締め

神奈川

越智淳子

精進湖にひがな遊べり夕蜻蛉

神奈川

越智淳子

山裾の陽たまりぬくし吾亦紅

神奈川

遠藤初恵

夕月の色なり白の曼珠沙華

神奈川

金澤道子

竹春や日暮るるころに晴れてきし

神奈川

金澤道子

月待つやあふるる前のさみしさと

神奈川

三玉一郎

渋柿の一本もなき柿の里

神奈川

松井恭子

見えぬ手が遊んでをりぬ曼珠沙華

神奈川

松井恭子

秋雨やワクチン接種長い列

神奈川

水篠けいこ

秋耕の老いやだんだん雄弁に

神奈川

中丸佳音

葡萄狩り房の間にまに富士が見え

神奈川

土屋春樹

姪からの白桃うれし敬老日

神奈川

那珂侑子

爽かや佐渡の空ゆく朱鷺の群れ

新潟

安藤文

往診は軽四で行く花芒

石川

岩本展平

青空と沖の白波初さんま

石川

松川まさみ

ルーペにて季語の本意をさぐる秋

長野

金田伸一

目つむりて心遊ばす星月夜

長野

金田伸一

金色の蜂の屍白露かな

長野

大島一馬

抽象の螢かも夜空はみだし

長野

柚木紀子

痛み止め一服金色鷺替

長野

柚木紀子

鷹渡る天の流れの高きこと

岐阜

古田之子

釣り場まで抜ける近道あかのまま

岐阜

辻雅宏

鬼の栖む山の麓や女郎花

岐阜

梅田恵美子

鯨を釣る戦艦沈む海の端

愛知

稲垣雄二

爽やかや二度目の接種今日済ませ

愛知

臼杵政治

ごころごととマチスの裸婦や大瓢

愛知

臼杵政治

草の実も畳まれ二年旅衣

愛知

宗石みずえ

隻眼の犬と吾あり秋の風

愛知

青沼尾燈子

世迷ひ言は聞き流すだけちちろ虫

京都

吉田千恵子

寡婦長き母の一生雁渡し

京都

氷室茉莉

桔梗やめりはり淡き日々のなか

大阪

高角みつこ

早稲の香やこの道行けば句会場

大阪

木下洋子

水色のことになつかし草の花

大阪

澤田美那子

帰らねばならぬ燕が相寄りて

大阪

澤田美那子

葛城のとある神社の茅の輪かな

大阪

齊藤遼風

一生を善意に生きて稲の花

大阪

齊藤遼風

ペン胼胝のかすかな痛み秋の夜	兵庫	千堂富子
秋の蚊のいつびき来たり我が膝に	兵庫	天野ミチ
叩かずに蔓で判ると西瓜かな	兵庫	藤岡美恵子
人恋坂行きつ戻りつ秋の暮	兵庫	福田光博
イモリ出で追えどどこかへ秋の宵	奈良	高坂泰子
身に入むや両の義足の大ジャンプ	奈良	田原春
カラカラに乾くタオルよ秋の風	広島	鈴木榮子
尻に根が生える婆さま芋茎剥く	香川	丸亀葉七子
浜木綿の実のふつくらと岬道	香川	曾根崇
セントラルパークの秋を歩みし日	大分	山本桃潤
木枕の雪や冬瓜横たはり	大分	竹中南行
押し寄せるクラクシヨンの音巴里九月	フランス	廣瀬玲子

九月二十日号

【特選】

引退はわれには在らず新酒汲む	宮城	長谷川冬虹
朝顔や入院のまま帰らざる	福島	渡辺遊太
山と積む根の無き言葉そぞろ寒	石川	松川まさみ
五臓六腑そろふ身照らせ月今宵	石川	松川まさみ
五十歩ほど歩いて休む月の道	岐阜	古田之子
老人の日とて牛肉焼いてみる	京都	佐々木まき
母の忌の一日を妻と良夜かな	大阪	齊藤遼風
怒る母秋の夕焼より真つ赤	香川	丸亀葉七子
露の間と言ふと謂へども斯く老いき	大分	山本桃潤
曼珠沙華咲いた形で死んでゆく	鹿児島	大西朝子
【入選】		
婆の声香ばしきかな玉蜀黍	北海道	高橋真樹子
虫の音や机の上の予診票	北海道	村田鈴音
をしみなく咲き散らかして芙蓉かな	北海道	芳賀匙子
月今宵地球の裏よりメール来る	北海道	柳一斉

栗入りの松茸飯の香る卓	岩手	川村查平
五臓六腑たちまち駆くる新走	宮城	長谷川冬虹
空つぼの墓石の群や曼珠沙華	宮城	長谷川冬虹
青空にぶら下がりたる木通かな	秋田	佐藤一郎
梨剥くやつくづく弱音見せぬ人	福島	渡辺遊太
表札に名が加わりて小鳥来る	茨城	袖山富美江
はなやかに空の半分秋夕焼け	埼玉	上田雅子
葡萄の葉ふどうの色に枯れにけり	千葉	若土裕子
自然薯のふるさと山の深からん	千葉	若土裕子
幼より届く文読む良夜かな	千葉	池田祥子
秋晴や大きく返すぬかの床	東京	小野早苗
漂泊の種のこぼれて草の花	東京	神谷宣行
からつぼの鳥籠かるし後の月	東京	長井亜紀
かぐはしき稲架のむかふは国上山	東京	長井亜紀
誕生日庭いっばいの水引き草	東京	長尾貴代

爽やかや朝の日課のごみ出しも	東京	楠原正光
身に沁むや義母の相続20人	東京	櫻井滋
団栗を踏みつつ歩む山の道	神奈川	伊藤靖子
旅の途に見知らぬ村の運動会	神奈川	越智淳子
菜園の爺に出くはす穴まどひ	神奈川	松井恭子
竜舌蘭の棘に拘るオニヤンマ	神奈川	水篠けいこ
男の子泣かせし記憶曼珠沙華	神奈川	中丸佳音
日のこる薬かく長し曼珠沙華	神奈川	中丸佳音
樽椅子や臍腑に沁みる新走り	神奈川	土屋春樹
小舟より竿で寄せたる菱を取る	神奈川	片山ひろし
稲すずめ転び合ひつつ稲の中	新潟	高橋慧
沼の辺の月にぬぎたる蛇の衣	富山	酒井きよみ
新蕎麦や主の心香り立つ	石川	密田妖子
星月夜壊れゆく国ガンダーラ	山梨	小泉雅恵
ふるさとや檜枯れ渡る哭きながら	山梨	小泉雅恵

秋空の高きがかすむ病かな

長野

金田伸一

秋の七草ひとつたりない満月光

長野

柚木紀子

今日祝し明け方の虫鳴きにけり

岐阜

夏井通江

暗がりにこほろぎ居りて大昼寝

岐阜

古田之子

布巾干す軒端明るし小望月

岐阜

三好政子

隆起せし大岸壁や秋高し

岐阜

三好政子

煙茸つつけばまこともくもくと

岐阜

梅田恵美子

残業の隣りの窓も月の中

愛知

稲垣雄二

鯊釣りや左右の人に会釈して

愛知

白杵政治

お使ひの鍋にゆうらり新豆腐

愛知

白杵政治

八人を育てし乳首吾亦紅

愛知

宗石みずえ

デイの着替へ一枚増やし秋時雨

京都

吉田千恵子

夜食用のラーメン誰に食はれしか

京都

氷室茉莉

秋耕や生涯過こす峡の村

大阪

木下洋子

再会を果たせぬままに柿の秋

大阪

木下洋子

夜半の月シャイな笑顔の句友逝く

大阪

木下洋子

テレワークは淋しくないか鰯雲

大阪

澤田美那子

椿の実ばちんと爆せて三等分

大阪

澤田美那子

帰るさの出迎へ嬉し草ひばり

兵庫

加藤百合子

稲架日和にほひ深むる淡路島

兵庫

魚返みりん

海に向く机にひとつラ・フランス

兵庫

千堂富子

秋晴れや金券売りにシヨップまで

兵庫

天野ミチ

三男の先導秋の沢渡り

奈良

田原春

満月が雲を出ました嫁の声

奈良

田原春

朝刊に露の手ざはり蛇笏の忌

和歌山

玉置陽子

しなやかな骨となりゆく芒かな

和歌山

玉置陽子

紅つけず過ぎしふたとせ秋に入る

広島

鈴木榮子

仕舞湯に聞く虫の声ことさらに

広島

鈴木榮子

蚯蚓鳴く闇にふたつの眼あり

長崎

ももたなおよ

資本主義故郷荒らす真葛原

大分

山本桃潤

九州を統ふる火の山露千里

大分

竹中南行

永遠の月の明りにわれらかな

大分

竹中南行

夜半の秋無能無才になれぬかな

大分

竹中南行

とんぼ飛ぶ巴里の老舗のシヨコラテイエ

フランス

廣瀬玲子

十月十五日号

【特選】

亀壺の酔の香の深む十三夜

千葉

池田祥子

耳たしかペンまたたしか夜の長き

長野

金田伸一

おそろしき水音たてて崩れ築

岐阜

梅田恵美子

ゆく秋の空に香るや塔ふたつ

大阪

澤田美那子

東塔と西塔の間栗を喰ふ

大阪

澤田美那子

あお空の底に大きな秋がある

兵庫

加藤百合子

この世ともあの世ともなく能登時雨

兵庫

魚返みりん

ミルフィーユパリの落葉の音立てて

和歌山

玉置陽子

【入選】

仕付け取り姿見に立つ秋夜かな

北海道

村田鈴音

栗こ飯喧嘩の事を忘れをり

北海道

村田鈴音

漁終えし船つぎつぎと秋夕焼

北海道

柳一斉

秋の雲こころ遠くへ旅したる

北海道

柳一斉

白樺を渡る風音秋深し

北海道

柳一斉

三代の南部杜氏や新走

宮城

長谷川冬虹

勇ましき話となりぬ今年酒

秋田

佐藤一郎

あれも嫌これでもないと秋の蝶

福島

渡辺遊太

秋の蝶今際の花に呼ばれたる

福島

渡辺遊太

鴉啼くや古戦場てふ村外れ

茨城

馬場小霧

仕入れ値の五倍の値段あげび売る

埼玉

園田靖彦

コロナ禍の弛みし後の夜長かな

埼玉

上田雅子

跳ね返るオール揃ふや天高く

千葉

麻生十三

顔も剃らずにコロナ禍二年秋の風

東京

岡恵

蓑虫の蓑入るころか火を熾す

東京

神谷宣行

秋風よ支払い終えし屋根修理

東京

長尾貴代

芋虫や派手な模様の伸び縮み

東京

楠原正光

新米を賜りて聴く故郷(くに)話

東京

畠山奈於

秋茄子のいろほればれと掌に

神奈川

三浦イシ子

わが齢不知火見ゆるかも知れず

神奈川

中丸佳音

これはまあ豪華な虹よ台風一過

神奈川

湯浅菊子

みちのくの虫食ひ木像そぞろ寒

神奈川

湯浅菊子

抱へるに程よきくぼみ冬瓜は

神奈川

那珂侑子

新米の釜の火かげん薪加減

神奈川

片山ひろし

月の窓まだまだ慣れぬテレワーク

新潟

安藤文

コロナ禍のわけてもうまき今年米

新潟

安藤文

恐ろしや裂けし石榴の奥の闇

新潟

高橋慧

手にのせてこの世映さんけふの月

富山

酒井きよみ

狂言師秋を深めて去りにけり

富山

酒井きよみ

爽やかや大谷翔平一周す

石川

花井淳

梅室忘修す句会に黒羊羹

石川

花井淳

呼び捨ての名前飛び交ふ木の実独楽

石川

岩本展平

長き夜を人なつかしき病臥かな

石川

松川まさみ

心の目開けて宇宙を詠まん秋

長野

金田伸一

深山に団栗の降る一夜あり

長野

大島一馬

ひとり子吾か白さるすべりにいとこはとこ

長野

大島一馬

美智子麻里郁子羨(こも)しも10月生まれ

長野

柚木紀子

スーパ―は小さな楽園芋の山

長野

柚木紀子

すれちがふだけの秋蝶遠ざかる

岐阜

夏井通江

数日を靛焼く匂ひ映の底

岐阜

夏井通江

頬杖に押し寄せて来る秋思かな

岐阜

古田之子

硯山色づく頃や玩亭忌

岐阜

古田之子

このビルに灯り一つの夜食かな

愛知

稲垣雄二

このビルに灯り一つの夜食かな

愛知

稲垣雄二

このビルに灯り一つの夜食かな

愛知

稲垣雄二

囀籠開けても逃げぬ囀かな

愛知

白杵政治

藤袴花屋の花に埋もれて

愛知

白杵政治

桃ひとつ矯めつ眇めつ妻買ひぬ

愛知

青沼尾燈子

五億年経て還り来し龍淵に

愛知

青沼尾燈子

孵卵器にかすかな鳴き声朝寒

京都

吉田千恵子

牛膝煙くすぶる一斗缶

京都

吉田千恵子

焼すぎず焼き不足なく焼く秋刀魚

京都

佐々木まき

われもまた藻に鳴く虫となりたき日

京都

氷室葉胡

月光に抱かれ柩自宅へと

京都

氷室葉胡

秋篠の御堂は木の実降るころか

大阪

安藤久美

秋晴や食料支援受くる列

大阪

木下洋子

貫入や色事もなき九月尽

大阪

齊藤遼風

天空の雲の島なみ良夜かな

兵庫

加藤百合子

をちこちに夕轟や大紅葉

兵庫

魚返みりん

柿もまた小さく切りて食す今

兵庫

天野ミチ

何色に今日を染めよう小鳥来る

兵庫

藤岡美恵子

長月や一途な君へ祝婚歌

奈良

喜田りえこ

身に沁むや比翼連理の塚の苔

奈良

喜田りえこ

笹漬の鯛のうすべに玩亭忌

和歌山

玉置陽子

玩亭忌再翻訳で読む源氏

和歌山

玉置陽子

桜守けふは葛根を掘るといふ

岡山

齋藤嘉子

日の神のゆつくり歩く刈田かな

岡山

齋藤嘉子

長生きの秘訣恋せよ秋の薔薇

香川

丸亀葉七子

柿の棹霧の山里暮れいそぐ

香川

曾根崇

登高や雲の上なほ雲流れ

香川

曾根崇

山川の匂ひ忘るな秋燕

長崎

川辺酸模

蛇笏忌や言葉に重さありにける

大分

山本恒雄

渾身の一句今こそ蟻蛸跳ぶ

大分

竹中南行

ポルドーの収穫終へし城へ月

フランス

廣瀬玲子

十月三十一日号

【特選】

宇宙から帰る人あり十三夜

東京 森徳典

轟沈の海を遙かに秋冷碑

茨城 馬場小零

すさまじやすべて暗渠に吸ひこまれ

神奈川 金澤道子

よべ編みし父のほまれの靛筵

埼玉 園田靖彦

かはいがるやうに無花果むきはじむ

石川 松川まさみ

何も無き畑にキラキラ鳥脅し

埼玉 藤倉桂

生身魂妻に消えざる恋ごころ

長野 金田伸一

ぼろおんと法螺貝響く夜長かな

千葉 菊地原弘美

ガーゼ彩々わが病室のちんちろりん

長野 柚木紀子

記念樹と齡かさねて松手入れ

千葉 若土裕子

膝から肘かさぶた七枚秋夕暮

長野 柚木紀子

コロナ禍の見舞ひかなはぬ林檎かな

千葉 若土裕子

身のうちの夢を怖るる長夜かな

岐阜 三好政子

冬近し黒き血潮の隅田川

東京 岡田定

桐一葉滑空をして着地せり

兵庫 高見正樹

秋夕焼恐竜の影地平まで

東京 岡田定

よく響く空つぼの胸木の実雨

和歌山 玉置陽子

月はひとつ羊羹には粟五六粒

東京 長井亜紀

【入選】

天仰ぐ車道に屈した鹿の貌

北海道 村田鈴音

初霜や友と通ひし通学路

東京 楠原正光

分葬の二文字鮮し紅葉寺

岩手 川村查平

立冬の背筋を伸ばし一歩かな

東京 楠原正光

くろぐろと秋刀魚のまなこ潮のいろ

宮城 長谷川冬虹

夫好む大馬鈴薯のオーブン焼き

東京 堀越としの

図書室の窓から見ゆる秋の虹

茨城 袖山富美江

困栗の落ちて転がる夜の屋根

神奈川 伊藤靖子

小春日やあの人かの人をりし日々

神奈川 越智淳子

干柿は天の恵みの甘さかな

神奈川 越智淳子

先客は野良の老猫日向ぼこ	神奈川	遠藤初恵
毬落ちてをり熊棚の新しく	神奈川	金澤道子
鶏頭ややうやく決まる帰郷の日	神奈川	松井恭子
芋煮えて平々凡々日が暮れる	神奈川	水篠けいこ
島猫となりし野良猫秋うらら	神奈川	中丸佳音
合掌し即身仏に冬の蠅	神奈川	湯浅菊子
富士山をそばに一日星月夜	神奈川	那珂侑子
身に入むやむかし学童疎開寺	神奈川	片山ひろし
神主の父いそいそと七五三	新潟	安藤文
すさまじき顔ぞろぞろと選挙戦	新潟	安藤文
石榴三つ描きて食ふてあとと酒に	新潟	高橋慧
雲余子と書けばばらとこぼるるよ	富山	酒井きよみ
がんもどきふつくら炊けて小春かな	石川	花井淳
秋風や一腑除きし身のかるさ	石川	松川まさみ
朝寒や同床猫の大あくび	山梨	小泉雅恵

老いてこそ心耳たしかや秋の風	長野	金田伸一
仔山羊らのふうちん揺るる十三夜	長野	柚木紀子
あけびの実風よりもいではかなさよ	岐阜	夏井通江
松手入脚立二云に板渡し	岐阜	三好政子
身に入むや鬼籍に入る友つづき	岐阜	辻雅宏
間引菜も入れてジューズや朝の卓	岐阜	梅田恵美子
米こそが近江の宝新走り	愛知	臼杵政治
あばら家は終の栖ぞ障子貼る	愛知	青沼尾燈子
菊の香や馬齢重ねて恙なし	京都	佐々木まき
山蘆辞し夢の続きの紅葉狩	京都	水室茉莉
蛇笏忌の楯かぐはしく爆ぜにけり	大阪	安藤久美
余生などしと安んじをれば鎌鼬	大阪	澤田美那子
足元の草ぐさまでも紅葉して	兵庫	天野ミチ
袋には従弟の写真今年米	兵庫	藤岡美恵子
綱を張る犬の勢い朝寒し	兵庫	高見正樹

どの子にも青空あるよ七五三

奈良 喜田りえこ

思ひ出は小春日和に似たるかな

岡山 齋藤嘉子

縁側に昼餉揃へん小六月

岡山 齋藤嘉子

塩を焚くあかり洩れをり十三夜

香川 曾根崇

縄張の中に我が家か鴟高音

香川 曾根崇

シスターも鎌を研ぐなり豊の秋

長崎 ももたなおよ

たわいなくけふはきのふへ蚯蚓鳴く

大分 竹中南行

焼き栗やモンマルトルの丘へ雨

フランス 廣瀬玲子

十一月十五日号

【特選】

われさきと迎えにくるよ雪螢

北海道 高橋真樹子

木枯や聞こえぬ耳を敬てて

福島 渡辺遊太

あかあをき卓の林檎よ今朝の冬

神奈川 越智淳子

未完なる闇の形の鯨かな

神奈川 三玉一郎

朽ち果てて月光になる鯨かな

神奈川 三玉一郎

大いなる佐渡の晴れ間の日向ぼこ

新潟 安藤文

狼煙から佐渡へ海道冬ざるる

石川 花井淳

烏瓜一つは命一つは死

愛知 稲垣雄二

一つ家の二人夜長をそれぞれに

京都 佐々木まき

冬の蝶いつまでも目が追うてをり

大阪 澤田美那子

焼芋や百歳にして母恋し

奈良 喜田りえこ

忘れたき一心で編む毛糸かな

和歌山 玉置陽子

しぐるるや病みてやはらか女の手

和歌山 玉置陽子

【入選】

まだ熟すところのこりし熟柿かな

北海道 高橋真樹子

秋天や同級生らと骨納む

北海道 芳賀匙子

錆深し工場のトタン泡立草

北海道 柳一斉

冬天や裾野の長き富士の山

宮城 長谷川冬虹

(悼寂聴)百歳に余白残して冬薔薇

宮城 長谷川冬虹

古い二人歩調を合はせ冬に入る

秋田 佐藤一郎

冬晴れや遠くに響く木遣歌	茨城	袖山富美江
リヤカーの運びに揺られ菊大輪	茨城	馬場小霧
ぞんぶんに浅間を詠んで秋惜しむ	埼玉	上田雅子
寂聴の訃報ある日の時雨かな	千葉	谷口正人
柚子の黄や朝日一身独り占め	千葉	谷口正人
冬茜別れし後は足早く	東京	岡恵
懐かしき十一月の黄蝶かな	東京	岡恵
冷まじや熊が生き骨齧る音	東京	神谷宣行
今朝冬の空を翔けるや銀の馬	東京	神谷宣行
新走り六腑に鶴の舞降りぬ	東京	神谷宣行
群青の甲斐の山より寒卵	東京	長井亜紀
すき焼きは芹ふるさとは雪のころ	東京	長井亜紀
老いの日々猫と似たりし秋日和	東京	杜野廉司
冬晴や光をまとふ樟大樹	東京	楠原正光
のんびりとがらくた市の文化の日	東京	楠原正光

一輪車枯れ葉の山に突っこめり	東京	櫻井滋
気にそまぬ事のあれこれ懐手	神奈川	金澤道子
散り敷いて山茶花たるを全ふす	神奈川	金澤道子
ふるさとは落葉をたたく雨ばかり	神奈川	松井恭子
とろとろと夕日を煮詰め熟柿ジャム	神奈川	松井恭子
耳遠き人に道問ふ小春かな	神奈川	中丸佳音
冬桜一つ一つの花たふと	神奈川	中丸佳音
旅に出る刻には止みぬ朝時雨	神奈川	那珂侑子
合の手にエイと餅伸ぶ命伸ぶ	石川	花井淳
湯の中の繭ころころと冬ざるる	石川	花井淳
手袋にペンだこ一つ納めをり	石川	岩本展平
夕刊はバイクで配る日短し	石川	岩本展平
着水の水に弾かれ鴨来る	石川	岩本展平
水仙は渡り来し花絹の道	山梨	小泉雅恵
天が下抜く大根の白さかな	長野	金田伸一

黄葉の散り尽くしたる虚空かな	長野	大島一馬
秋晴れ過多至福の時間死から生	長野	柚木紀子
うれしさよ晩秋深夜届くクロネコ	長野	柚木紀子
チケツトをしをりに使ふ小春かな	岐阜	夏井通江
茨線の獣の毛鳥の毛秋野原	岐阜	古田之子
波立てて風わたる余呉の湖	岐阜	辻雅宏
人垣へゴリラ尻搔く小春かな	岐阜	辻雅宏
ビル影がビルに掛かりて冬に入る	愛知	白杵政治
ころころと向いの家へゆく落葉	三重	乾薫
掃き寄せる落葉を土に戻しけり	三重	乾薫
木犀の返り花なりかそけくも	京都	佐々木まき
小春空手に手を引かれ行く散歩	京都	氷室葉胡
煮て焼いて晒して三品芋日和	大阪	安藤久美
葛湯練るしだいに花のあきらかに	大阪	澤田美那子
しづるるや借る軒も無きビルの街	大阪	澤田美那子

木犀も終りに近き香なりけり	大阪	齊藤遼風
上賀茂に椎の実落つる時空あり	兵庫	加藤百合子
もみじ葉は舞ひ散るための形かな	兵庫	加藤百合子
小鳥くる十方世界水のころゑ	兵庫	魚返みりん
綿虫はいずこに行かむ日暮れ道	兵庫	福田光博
湯豆腐や崩れゆくととき美しく	奈良	喜田りえこ
泥団子ひとつ一つに敷く落葉	奈良	田原春
三輪山の寝息の音か酒醸す	岡山	齋藤嘉子
通草蔓細いの太いの縮ね売る	岡山	齋藤嘉子
暖冬やなりをひそめてゐる病魔	香川	丸亀葉七子
己が根をあたたためてゐる落葉かな	香川	曾根崇
弟の骨となる間や秋時雨	香川	曾根崇
銀杏の実拾ふ背中にまた一つ	長崎	川辺酸模
鮭の川命が命食らはんと	大分	山本桃潤
立冬の心定まる河口かな	大分	竹中南行

拾立てて焼き栗の列シヤンゼリゼ
匂ひたつ枯葉や巴里の日の骸

フランス 廣瀬玲子
フランス 廣瀬玲子

十一月二十日号

【特選】

十二月八日のラツパはるけしや

秋田 佐藤一郎

今は亡き猫ひぎにある小春かな

神奈川 越智淳子

伊賀大津浪速思ふや翁の忌

神奈川 越智淳子

生と死の間まふしき日向ぼこ

神奈川 三玉一郎

裸木の村に帰りぬブリューゲル

石川 花井淳

はづかしゆうない無花果吸え往還

長野 柚木紀子

綿虫の無より涌き出てさまよへり

岐阜 夏井通江

すみれいろの夕暮包むマントかな

和歌山 玉置陽子

あわてても齢七十寝正月

長崎 川辺酸模

【入選】

朝の雪瓶に詰め込む小さな手

北海道 村田鈴音

声わるきつがひのからす十一月
北海道 芳賀起子

骨壺に人は納まり秋の風
北海道 柳一斉

冬の雷季語の奴隷となるなかれ
宮城 長谷川冬虹

小春日や死との密かなディスタンス
福島 渡辺遊太

山門に最後の一葉冬紅葉
茨城 袖山富美江

癒えよ君つつじ真白に返り咲く
茨城 馬場小零

いななける馬の齒茎の寒さかな
埼玉 園田靖彦

七五三着物脱がぬと泣く子かな
千葉 谷口正人

しなり良き冬木とならん誕生日
千葉 池田祥子

俳書読む寝床の中の寒さかな
千葉 麻生十三

凼にあらがふ波や隅田川
東京 岡田定

今朝の冬恥づることなく妻を抱く
東京 神谷宣行

恋人と鯛焼の列に並びけり
東京 長井重紀

鯛焼を食べる子どもとひだまりに
東京 長井重紀

通り道鴉飛び交ふ十二月
東京 楠原正光

傘寿過ぎてラケット買へり秋高し

東京 畠山奈於

綿虫は御用御用と芝を飛ぶ

東京 堀越としの

耳遠きわれに道とふ冬の蝶

東京 櫻井滋

留守電に彼女の訃報冬葎

東京 齊藤拓

山茶花やマドンナの骨拾ひけり

東京 齊藤拓

新米と一本の稲届きけり

神奈川 伊藤靖子

磨屋の柚子鈴なりに陽を集め

神奈川 遠藤初恵

夜つびいて木がらし枯らすもの探す

神奈川 金澤道子

逝かれたる人の思ひの大根引く

神奈川 松井恭子

真つ青な空の端まで懸大根

神奈川 松井恭子

小春日や浦賀水道百千船

神奈川 水篠けいこ

救急車のサイレン聞きつつ炬燵かな

神奈川 水篠けいこ

ふるさとの太き柱よ火恋し

神奈川 中丸佳音

冬麗や棺の弥生人の丈

神奈川 中丸佳音

木枯らしや今日も立ち寄る天然湯

神奈川 土屋春樹

真夜中に腹まで響く霧笛かな

神奈川 土屋春樹

星の夜は夢見る鯨となりにけり

神奈川 湯浅菊子

連れ立ちて老婆二人冬田道

神奈川 那珂侑子

閑上の赤貝ですと鮓握る

神奈川 片山ひろし

いつまでも卓の上なる蜜柑かな

新潟 安藤文

しんみりと霰打つ音聞きあたり

新潟 安藤文

寒鳥何見つめ居る一羽かな

新潟 高橋慧

とまりて花こぼれて花や冬すずめ

富山 酒井きよみ

黙から生れ鉄線返り花

石川 花井淳

信楽の里底冷えの轆轤蹴る

石川 花井淳

われもまた枯るるからりと音たてて

石川 岩本展平

校庭に地上絵を描く小春かな

石川 岩本展平

道間はばところところの冬すみれ

石川 松川まさみ

いつの世のふたりやふたつ返り花

石川 松川まさみ

皮となり板張りの熊乾きゆく

石川 密田妖子

モーツアルト冬の朝日の柔らかき

長野

金田伸一

暖冬や裸をとほすさるすべり

長野

金田伸一

霜は深夜に和服茅舎は露ちらし

長野

柚木紀子

月に影映し地球の月見かな

岐阜

古田之子

市ヶ谷に右翼の車三島の忌

岐阜

辻雅宏

玉砂利や抱つことなりぬ七五三

岐阜

梅田恵美子

東京は夢の中まで虎落笛

愛知

稲垣雄一

鞍はずせし若き馬より湯気立てり

京都

吉田千恵子

間引きし孟宗竹立て雪囲

京都

吉田千恵子

目病みして辺りものみな冬さるる

京都

佐々木まき

地球には数多の言語冬銀河

京都

氷室葉胡

晴れ晴れと十一月が終はりたり

大阪

高角みつこ

好きだった冬が年々つらくなり

大阪

内山薫

冬満月地球の影が通りすぐ

大阪

澤田美那子

冬桜おもひつめたる花いくつ

兵庫

魚返みりん

寒林に隠る場所なし空の青

兵庫

高見正樹

天地の嘆きの歌を冬といふ

奈良

喜田りえこ

茜して大きな冬の来てゐたり

奈良

喜田りえこ

水鳥の水上走り逃げおほす

奈良

田原春

煮凝や夢の中まで風の歌

和歌山

玉置陽子

碧空やどの障子よりか張り替ふる

広島

鈴木榮子

焙じ茶の薫る茶の間や冬隣

香川

曾根崇

石榴割けかつと命の瑞々し

長崎

ももたなおよ

凧や家毀さるる音もして

長崎

ももたなおよ

十二月十五号

【特選】

旅人のこころで拾ふ落葉かな

北海道

芳賀魁子

鈍彫のやうな山なみ大根干す

神奈川

金澤道子

もどれないところまで来し日向ぼこ

神奈川

三玉一郎

・もどれず、で十分。どこにいて、どこにもどれないか、不明。

日向ぼこ眼つぶれば地球回る

神奈川 松井恭子

冬薔薇の蕾の如き覚悟あり

愛知 稲垣雄二

柚子大樹とげの長さもただならぬ

兵庫 藤岡美恵子

・ね、ず。ぬ、すわりわるし。

かの昔富国強兵寒卵奈良

喜田りえこ

ささやきの小径へ誘ふ雪虫

和歌山 玉置陽子

あちこちに寄り道したる炬燵かな

大分 竹中南行

【入選】

寂聴を読み散らかして冬籠り

北海道 村田鈴音

・寂聴への姿勢、不明確。

初稽古小手取られたる口惜しさよ

宮城 長谷川冬虹

初稽古口惜し涙で汁粉吸ふ

宮城 長谷川冬虹

初稽古父子に戻る帰り道

宮城 長谷川冬虹

・いずれも場面の描写は十分。ここからどうするか。

海吼えて鯽逸る日なりけり

秋田 佐藤一郎

草枯れや読めぬ句碑立つ村はづれ

秋田 佐藤一郎

櫛炭音なく崩るる霜夜かな

福島 渡辺遊太

笑顔にてマフラー渡す別れなり

埼玉 藤倉桂

新巻のあざとに荒縄痛からん

千葉 若土裕子

・に、を残したこと 猛反省すべし。俳句を誤解しているか。

手焙に祖母のおもかげ餅ふくる

千葉 若土裕子

故郷の干し海老届く年用意

千葉 池田祥子

山茶花の散るより早く掃きにけり

千葉 麻生十三

・掃かれけり

太陽の末つ子である茶の花よ

東京 長井亜紀

さざんかの震えて居りぬ雨の朝

神奈川 伊藤靖子

初雪や肩に落ちては水玉に

神奈川 越智淳子

まずは喜寿までと三年日記買う

神奈川 遠藤初恵

大鴉はさと羽搏き寒波来る

神奈川 金澤道子

土牢にやうやく届く冬日かな

神奈川 金澤道子

もう声のどかぬ日向ぼっこかな

神奈川 三玉一郎

うしろから付いて来るのか寒鳥

神奈川 水篠けいこ

・か、ダメ。

一日の終りは坐禅ふゆの月

神奈川 那珂侑子

・立派ですが、つまらない。

オンライン越しの恥づかし忘年会

新潟 安藤文

かすみ目に遠白馬の雪真白

長野 金田伸一

雪間門去ねやらず巨かもしか

長野 柚木紀子

幻の花一面に枯蓮 岐阜

夏井通江

・逆。枯はちす、とはじめる。今の形は枯蓮の説明。

掌に綿虫の影ありにけり

愛知 稲垣雄二

東京は大き狐火煌々と

愛知 稲垣雄二

己が悩み小さし冬の大三角

愛知 宗石みずえ

年の市防犯カメラそこかしこ

京都 吉田千恵子

禁煙を破る一本枯葉散る

京都 氷室葉胡

・しょっちゅう破っているような句。

襦袍とは知らず襦袍を着てをりぬ

大阪 高角みつこ

工場の蒸気の濃さや冬の朝

大阪 内山薫

はたこれも自動音声年の暮

大阪 内山薫

わざをぎの力を見たり花の春

大阪 木下洋子

・ご挨拶俳句。俳句はお礼代わりではない。

風呂吹やとろりとかかる味噌もまた

大阪 澤田美那子

・また、とは？

夫にひとつ息子にふたつ寒卵

大阪 澤田美那子

燃えつきるとききの華やぎ冬紅葉

兵庫 加藤百合子

・ときはなやかに？

ひさびさの会合に急く小春かな

兵庫 加藤百合子

冬の日やほのと仏のたなごころ

兵庫 加藤百合子

・ほのと、不要。

除夜の鐘みづの真闇が揺れてゐる

兵庫 魚返みりん

大根や喰ふは上手に煮るは下手

兵庫 天野ミチ

・に、不要。安易に入れない。

初採りは丸ごとかじる小蕪かな

兵庫 藤岡美恵子

鐘の音の唸るがごとく去年今年

兵庫 福田光博

・音、不要。

冬の波見え隠れする漁り船

兵庫 高見正樹

大根焚きまづ一椀を大黒へ

奈良 喜田りえこ

ずたずたの父の青春開戦日

長崎 酸模

君をまつ温かき石大枯野

大分 山本桃潤

東京駅吐き出す人間冬ささるる

大分 山本桃潤

凧や反旗のかかる凱旋門

フランス 廣瀬玲子

十二月二十一日号

【特選】

あこがれのものぐさ太郎大旦那

東京 神谷宣行

帰省子のこころの丈も伸びてをり

東京 島山奈於

・夏の句

初鏡増えてよろしき笑ひ皺

神奈川 松井恭子

そこそこの大事ありけり除夜の鐘

長野 金田伸一

独り純白パズル埋むる雪夜

長野 柚木紀子

吊られたる外套同士ひそひそと

愛知 青沼尾燈子

雪女郎今夜あたりと言ふ今夜

京都 佐々木まき

晴れているだけで一福初詣

京都 佐々木まき

こんな夜でありしと櫓を一つ足す

大阪 安藤久美

音かろく胸にひびかせ初箒

大阪 安藤久美

雪の日を泣く子はあねが肩ぐるま

大阪 高角みつこ

搦きたての餅の粘りを今年こそ

大阪 木下洋子

スケーター白き孤独のただ中へ

大阪 澤田美那子

寝室の奥まで白む雪の朝

広島 鈴木榮子

【入選】

終ひ湯に五体投げ出し去年今年

北海道

村田鈴音

・す

大の字に転がる猫や冬ぬくし

北海道

村田鈴音

・下五、再考。

俳句的生のほとりへ初詣

北海道

芳賀匙子

焼芋屋けふも淋しき笛鳴らし

北海道

柳一斉

歌仙巻く軽みのこころ大旦

岩手

川村查平

くわつくわつ白鳥の声王子呼ぶ

宮城

長谷川冬虹

初雪や托鉢僧は直角に

秋田

佐藤一郎

獵人の鹿追い詰めし笛鳴れり

福島

渡辺遊太

猟寂し牡撃たれば連れもまた

福島

渡辺遊太

寒雀我が足音に高く飛び

茨城

袖山富美江

朝焚火熾ん翁の農用意

茨城

馬場小零

幾万の言葉の海へ初明り

埼玉

園田靖彦

初夢や我も乗りたき宝船

埼玉

上田雅子

長病みの母に笑顔や初鏡

埼玉

藤倉桂

猛省のあまたあまたや除夜の鐘

千葉

若土裕子

滔々と詩歌の大河去年今年

千葉

若土裕子

古びたるキャメルの下着父の冬

千葉

麻生十三

もう五日まだ五日あり年の暮れ

東京

岡田定

クリスマス腰に頭に鍼百本

東京

小野早苗

十年来慣れ親しみし冬帽子

東京

森徳典

除夜の鐘ききつつ帰る妹よ

東京

長井亜紀

踊るかど夫誘ふ夢クリスマス

東京

畠山奈於

初夢や宇宙旅行の無重力

東京

櫻井滋

着ぶくれて並ぶワクチン三回目

東京

櫻井滋

チューリップ眠る花壇に霜柱

神奈川

伊藤靖子

雪原にうつむく木々や綿帽子

神奈川

伊藤靖子

安らかや家に居ること去年今年

神奈川

越智淳子

町内のの柚子の集まる柚子湯かな

神奈川 松井恭子

渋紙の天井走る嫁が君

神奈川 水篠けいこ

列島の岩打つ飛沫大旦那

神奈川 湯浅菊子

もう一度ゆず風呂にせん太三十日

神奈川 那珂侑子

覺替の貧しき顔の揃ひけり

神奈川 片山ひろし

ピーと鳴る薬缶の音や寒に入る

神奈川 片山ひろし

・笛

齒につきし餅もつれしや雑煮喰ふ

新潟 安藤文

黙々と父は注連縄縫りにけり

新潟 安藤文

くれなゐにひそむ哀しさ寒の紅

富山 酒井きよみ

ひと睨みしては噛み込むごまめかな

石川 花井淳

追ひ掛ける二十四節季年新た

石川 花井淳

ふるさとの音に包まれ冬ごもり

石川 岩本展平

年用意あれもこれもを棚に上げ

石川 松川まさみ

・と

煤逃げて勝を急がぬ碁打かな

長野 金田伸一

九絵一本捌く師走の誕生日

長野 金田伸一

南天の実数減らしつ師走かな

長野 大島一馬

・数、不要。なぜ数を入れたか。

凍らじや舌歌十脚十の指

長野 柚木紀子

太陽は小さき白き冬の花

岐阜 夏井通江

川沿ひに市立つ朝や雪こんこ

岐阜 辻雅宏

初雪や捨てどころなき齡の滓

愛知 稲垣雄二

がらんだう子ども部屋を煤払ひ

愛知 稲垣雄二

ゆつたりと披講聞くべし十二月

愛知 臼杵政治

病室のあの隅にまで初日かな

愛知 宗石みずえ

凧や丹田にある熱きもの

愛知 青沼尾燈子

酢菘漬葉を整へて店頭へ

京都 水室菜胡

来年はいかに遊ばん雪しんしん

大阪 高角みつこ

着膨れて独り暮れゆくテレワーク

大阪 内山薫

天辺に鶯葉置き雑煮餅

大阪

澤田美那子

・椀

おんおんと春日若宮おん祭

兵庫

魚返みりん

初晴の風やまつさら割烹着

兵庫

魚返みりん

枯蠹螂木端となりて草の中

岡山

齋藤嘉子

蒸し楮取り出す人と受くる人

広島

下田あつ子

パチパチと跳ねる銀杏美食へ納め

広島

鈴木榮子

納札焚くや句殻も放り込み

香川

曽根崇

何とまあ図太く生きて晦日蕎麦

長崎

ももたなおよ

桃源に心遊ばせ日向ぼこ

長崎

川辺酸模

七十の闘志ひそめて日向ぼこ

長崎

川辺酸模

虎落笛孤独が齧るわが身体

大分

山本桃潤

からまりし糸や熱燗酌みにけり

大分

竹中南行